

2018



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
1月号
No.655

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



謹
賀
新
年

平成三十年 元旦





二〇一八年・平成三十年
戊戌（つちのえいぬ）

今年（いぬどし）は戊戌年（いぬどし）。十干十二支（じっかんじゅうにし）のうち、いわゆる干支（えと）で云うと「戊戌（つちのえいぬ）」にあたる。

「戊（ぼ）」は十干の5番目にあたり、植物の成長に例えるなら勢いよく葉が茂る様子を表し、繁栄を意味している。

「戌（じつ）」は十二支の11番目にあたり、枯れた木を表し、終焉、滅亡、終わりを意味する。

栄えあり、滅びあり。世の中に大きな変化があるともとれるが、良い方へ向かうことを願う。

以前、家族皆で中国へ行ったとき、上海の城隍廟（じょうきやうびやう）に六十体の干支の木像があったのを思い出す。そもそも「壬支（にんし）」は「黄帝（わうてい）、大撓（たいたう）をして甲子（かうし）をつくらしむ」と「漢書（かんしよ）」にあり、BC2500年頃生み出されたとされる。やがて日を数えるのに使われていたものが、漢の武帝の頃より年に割り当てられるようになった。

生命の成長過程を10段階と12段階の文字に表して組みあわせ、さらに陰陽と五行「木火土金水」が加味された60の「干支（えと）」には、私達人間も含めた生命の営みが、生き生きと幾久しく続くように、との願いがこめられているように思う。

「戊戌」と名付けられた今年一年、まずは心と体が健やかでありますようにと願っている。



ソロバンノキ 櫻子

花材 青文字 (楠科)

チューリップ3種 (百合科)

花器 陶鉢

別名シウガノキ、ソロバンノキとも呼ばれるアオモジ。クスノキ科の落葉小高木で、昔からあるいけばな花材として秋頃から花屋に並ぶ。そのせいか、緑のつぶつぶを実たと思っている人が多い。桐や猫柳と同じ花の蕾なのだが。

淡緑色の苞に数個の蕾が包まれている。だんだん大きくなって、やがて苞が割れて蕾が顔を出す。暖かい部屋なら白い花が咲くこともある。真冬にわざわざチューリップをいけなくてもよいと思うが、春を待つアオモジと取り合わせたくなった。木肌がうす汚れた緑色なので、いける時は幹を隠し蕾を目立たせたい。最近お菓子の楊枝も黒文字よりも青文字の方が多くようだ。キリッとされたこげ茶色の楊枝で和菓子を頂きたいのだが。



横から見た奥行き



清々しい翠 みどり

△表紙の花▽

仙溪

花材 枝若松(松科)
シンビジウム(蘭科)
千両(千両科)

花器 紫紅彩陶花器(幾左田昌宏作)

ワカマツ3本、ラン1本、センリョウ1本のお正月花。紫色の釉薬が美しい花器に、底に置いた剣山に松と蘭をさし、千両は投入でいけた。上品でおちついた雅を感じるいけばなになった。器の色と形で花の雰囲気がいふんと違ってくる。螺鈿の入った敷板がうまく合ってくれた。



横から見た奥行き



寿松 ことぶきまつ

△2頁の花▽

仙溪

花材 寿松(松科)
エビデンドラム(蘭科)
白玉椿(椿科)

花器 耳付陶花瓶(宇野仁松作)

コトブキマツと名の付いた根付き松。短くて濃緑の丈夫な葉が密生している。こんもりした感じと独特の風情を感じる。鮮やかな色の蘭を合わせると、特別感が増してくる。寿松はキリッと立てて、エビデンドラムはしなやかな動きを出した。西洋的な色と形の器が似合う。白玉椿はつなぎ役。



横から見た奥行き



日の出

△3頁の花▽

櫻子

花材 南天(目木科)
オンシジウム(蘭科)
アイリス(菖蒲科)

花器 舟形陶花器(宇野仁松作)

山で、海で、初日の出を拝まれた方も多かったのではないだろうか。新春を言祝ぎ、お日様への感謝をこめて。日の光が世界を照らし、温もりが届きますように。アイリス(虹)の彩りを加えて。



横から見た奥行き

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ④

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

竹

祝言。上中。

竹の字、形かたちに象かたどりてこれを作る。

本草綱目に云う、竹葉必ず三つあり。枝必ず二つあり。その根好んで東南に行く。

戴凱たいき之の竹譜たけふに云う、植物しょくぶつ(うゆるもの)の中、名あり、竹という。剛こわからず、柔やわらかからず、草にあらず、木にあらず、云々、これ通用の證文しょうもんなり。

通用の證歌

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはし
に我が身は成りぬべきなり

異名 石母草せきもそう 此君しくん 吾友ごゆう 不秋草ふしゅう

和名 千色草 小枝草 河玉草 夕玉草ゆうたまぐさ

古歌

秋風はまどなる竹にかよふなり河玉草を



第六十八図

立花 竹真

寺田清左衛門

竹 梅 松 水仙 柘植 椿 熊笹 枇杷

なにといふべき

月にきく夕玉草の秋風に音はいつ頃寢覚

めとはまし

竹^{ただけ}黄。また云う、天竺^{てんじく}黄。天竺^{てんじく}二国に生じ、

天竹と名付くは淡竹^{はちく}。

竹は心、請、副にかぎらず、葉を床の後ろ角へなびかせ、上の節より四五分の中にて一文字に切りて、そぐべからず。下は水ぎわより四五分にて、必ず節を見せる。古語に、松に古今の色無く、竹に上下の節あり。この心をもつなり。

竹は古来、上より下までよく見えるように立てるを専らにすといえど、花形によりて、胴前置にてかくれる事あり。竹を見せんとて花形の悪しきは、却^{かえ}つて竹の賞翫にあらず。

竹の前に苔、晒木の太く直なるを立てること、古来より嫌う。竹をかくすのみならず、竹の直なると同意にて悪しし。



第三十二回

立花 竹除真

除真の内草の花形 菱屋六兵衛

竹 枇杷 松 梅 晒木 柘植 椿 熊笹 榿木

水仙 伊吹

乱世の「茶」と「花」

昨年公開された映画「花戦さ」は、天下人である秀吉と、茶の利休と、花の専好の関係が軸になっている。とりわけ利休と専好の茶室でのやりとりの場面が強く印象に残った。

専好ははじめて利休の点てた茶を飲んだとき、何か大きな温かいものに包み込まれ、心が解けてゆくのを感じて涙する。庭、茶室、そこに生けられた花、会話、所作、それらすべてが温かな心で満ちていたのだろう。戦乱の世にあって、利休の茶によつて心を癒やし、心を清めることができた武将たちのことを思った。

映画の後半、秀吉の怒りを買った利休に対して、心配でしかたのない専好は「上様に詫びを入れられればいいではないですか。これも『もてなし』だと思って、包み込むように詫びを入れればいいではないですか」と言う。その言葉を聞いた利休は「もてなしか。私はいつの間にか大事なことを忘れていたのかもしれない」とつぶやく。強く印象に残る場面だった。温かく包み込む心。これこそ、究極の茶であり花である。そんなメッセージが込められている。

茶と花の二人の偉人。ともに命をかけて茶の道、花の道を守り貫いた。そしてその道を、私達も歩んでいる。



京都嵐山花灯路2017

会期 後期12月13日(水)～17日(日)

会場 二尊院山門前

出品 桑原仙溪

臘梅 アララギ

珊瑚水木 (写真②)



三賢人のような 仙溪

花材 大王松(松科)

飯桐(飯桐科)

胡蝶蘭(蘭科)

花器 掛分陶花瓶(清水保孝作)

立派なダイオウシヨウを花器の底に入れた剣山を頼りに留め、イイギリを立て、コチヨウランを出した。単純な構成だが、それぞれの特徴が生かされたと思う。

簡単にいけてあるように見えるが、コチヨウランの茎が長くて丈夫でなければ、このようにはいけられない。そして松の重みを受け止めてくれるどっしりした器を選ぶことも大切だ。

ダイオウシヨウはアメリカ原産で特別に長い3本の葉が出る。日本のお正月にダイナミックな華やぎを添えてくれるが、どんなところで育った植物でもいける対象になる。調和する出逢いを生むのは難しいが、考え甲斐がある。

三つの花材が対等な感じにおさまって、三賢人のようだ。



横から見た奥行き



生花二瓶飾り 仙溪

花材 ヒマラヤ杉(松科)

スプレー薔薇(薔薇科)

花器 杵形陶花瓶

陶抹茶碗

四国の花展でいけたヒマラヤスギは、大切に持ち帰って、今度は生花に直した。生花の基本形から少しはみだしても、自然味を損なわないよう、ある程度の枝は残していている。

小振りになったので、赤いバラと一緒に飾ることにした。真に2輪並んでいるのは大らかに考えることにしよう。

ヒマラヤスギは日本では明治時代初期から栽培がはじまったそうだ。原産地はヒマラヤ北西部からアフガニスタン。建築材にもなり、油分が薬やアロマに利用されている。日本の各地に植えられているが、昨秋の台風で京都府立植物園の35mのヒマラヤスギが倒れたと聞いた。高松の栗林公園にも大きなヒマラヤスギがあったので心配している。



「今年もよろしくお願いします」レモン



赤茶色のヒペリカム

櫻子

花材 アマリリス(彼岸花科)
ヒペリカム(弟切草科)
ミリオクラダス(百合科)
花器 陶花器(近藤豊作)

秋が深まると枝も葉も実も赤茶色になるヒペリカム。夏までに剪定すれば9月にはもう一度花が咲くので緑の葉と赤い実が楽しめるが、剪定せずに力強くなった枝はアマリリスの足元にもこんもりと添える事が出来た。昔からの冬の枝もの花材は少なくなつたが、又新しい改良種が加わつて彩りを添えてくれる。

冬にアマリリスをいける時は首元までしっかりと芯棒を入れてあげる事。私の家のように皆が集まる部屋以外寒すぎる室内だと、飾っている花も凍てつく事がある。大輪の花が咲きそろつても、重さと寒さで折れ曲がらないようしっかりと支えてあげよう。



横から見た奥行き



薔薇ばらのように 櫻子

花材 葉牡丹はばたん(油菜科)

ミニ・デンファレ2色(蘭科)

スイートピー(豆科)

花器 赤釉陶花器(宮本博作)

冬の寒さに晒されて葉緑素が抜け、クリーム色に色づいたハボタン。昨年は葉が縮れて切葉水菜のような品種を飾って楽しんだが、今年は丸くて小さいハボタンを選んだ。

ハボタンだけでは地味に見えるが、葉を広げて大きく見せ、スイートピーのような優しい姿の草花と合わせると大輪のバラのようだ。珍しい花ではないが、お正月にしか出荷されないので、一度は買いたくなる。私は料理が好きなので珍しい野菜を買い求めるような感覚で欲しくなるのかもかもしれない。

ハボタンに白いスイートピー。そこへピンクのミニ・デンファレを加え、赤い器にいけると、明るくて華やかな花になった。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
2月号
No.656

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





見方を変えてみる

今年は明治維新150年にあたり、大河ドラマも西郷隆盛が主人公。今なお人気を博す「西郷どん」のように、大きな眼で遙か遠くを見つめ、視野を広くもち、己の道を俯瞰する。そんな一年にしたい。と、カッコ良く言ってはみたが、健康で日々の仕事を精一杯できればなによりだ。

でも、今までとちよつと違う物の見方をしてみることが、新たな発見に結びつくきっかけになると思ふ。自分の中に眠っていたものが目覚めることもあるに違いない。視野を狭めず、柔軟に見方を変えてみようと思ふ。

いけばなでも、普段使わない器にいけると、いつもと違う花になつたりする。また、いけた花を一度少し離れた所から見おしたり、別の角度から見ること、足りないところに気付くこともある。「見方を変える」のは大事なことだ。

ネコヤナギ 櫻子

花材 猫柳(柳科) ストック(油菜科)

喇叭水仙(彼岸花科)

花器 陶大皿(モロッコ製)

以前、アフリカのモロッコで花展をした時、幼稚園児が大勢で見に来てくれた。その時の子供達の笑顔を思い出しながらラッパスイセンをい



けた。ネコヤナギの柔らかな感触が優しく寄り添う。



横から見た奥行き

コデマリ

仙溪

花材 小手毬こてまり (薔薇科)

チューリップ (百合科)

玉羊歯

(玉羊歯科・蔓羊歯科)

花器 陶花瓶

コデマリとチューリップを投入すると、上がる姿と下がる姿の対比が際立つ。チューリップの花色は2種以上にしたい。



横から見た奥行き



ヴロアウン 櫻子

花材 オンシジウム（蘭科）

ミニ胡蝶蘭（蘭科）

ゲイラックス（山石梅科）

花器 鶴首陶花瓶

「ヴロアウン」2種

家元宅での初春の会には、新年のお料理が並ぶ宴席に、花の設えをして楽しんでる。今年には鶴首花生け「ヴロアウン」に花をいけて飾った。これは京都青窯会作陶展の50周年を記念して考案された焼きものである。

シンプルでモダンを基本とした一輪挿しが青窯会の作家や職人によって様々な技法で生まれていくのが楽しい。

西出真英作の「掻き落とし」、前田安徳作の「鉄釉」を並べて、オンシジウムと胡蝶蘭をいけた。「ヴロアウン」はスウェーデン語の「青い窓」という意味だそうだ。今後も青窯会の皆さんがつくる器が楽しみだ。



横から見た奥行き

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ④

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

竹は心しんのみにかぎらず、二本遣つかう常つねのことなり。竹の林と見る時は、三本五本くるしからず。又三本遣つかう時、一本ゆがみたるは苦しからず。二本ゆがみたるは許ゆるさず。

添そえ竹とて、細き竹を心にあしらう。葉のある竹ならば上を一文字に切るべし。祝言なり。枯れたる竹ならば、先をそぎても苦しからず。不祝言なり。立て様口伝あり。

竹は自ずから正心をかねたりといえど、わくら、水仙などの細く柔らかなる物を、正心にあしらう。常のことなり。然るに玉林の門流には、竹の後ろに松、鶏頭を立て、正心あしらいと見て、前にはあしらいなし。これ竹をよく見するを賞翫しょうくわんとしたる道理おもしろし。しかれども花道本

一家より出て、末両義に別れたることいふかし。今様には前に立てるを真のあしらいとし、後ろに立てるを草くさとす。

竹を片なびきに遣つかう、常のことなり。両なびきの時は笹ささの靡なびき、意得あり。

第九十図

立花 竹除真
竹の胴 擇善子 (初版は桑原次郎兵衛)
嫩な竹 梅 伊吹 晒木 柘植 熊世 小菊 水仙
檜木



竹の請には流枝に意得あり。竹の胴、見越竹、口伝。

三つ具足立ての花の添え竹は、上の節より四五分置いて一文字に切る。さて心の枝と、竹の留まりとの間を一寸ばかりあけるなり。花形の大小によりて変わるべし。

竹の心請の見越には大葉、或いは大輪なる花を用いるべし。竹ほそき物ゆえ取り合いよし。

竹の子は砂の物によろし。立花に立てる時は竹の心しんより高く立てのぼすべし。

七本竹と云うこと古来よりなき事なるを当意即妙の一曲、誠に名師の修練なり。世人これをゆめゆめ努々学ぶことなけれ。竹は一色に立てざる道理分明なり。

砂の物には大竹を賞翫とす。太き竹に葉の付きたるなき時は、生竹にても枯竹にても太きを

立て置き、さて細き竹の葉茂りたるを立て添えて心に用うべきなり。三本遣う時はさび竹、くさり竹、仙人杖、切り株竹など取り混ぜて遣うべし。

立花の心、竹太く葉付きよく、しだれ長き時

第九十三回

立花 松除真

見越竹 谷久兵衛 (初版は桑原次郎兵衛)
松 苔 梅 竹 柘植 椿 菖菘 枇杷 嫩



は、一本立てても苦しからず。

竹太きは葉久しく枯れず、細きは葉はやく枯れるなり。

竹は切りて根をやきて立つべし。又上の節をぬきて水を入れて立つべし。

葉しおるる時は酒をふき、塩水をふく。外に口伝あり。

学海に曰く、竹は八月を以て春とす、とあれど、立花には五月六月を賞翫とする物なり。

竹に苔はうつりよし。晒木はうつらさず。

第九十図、九十三図は「秘曲の図」の内の「竹の胴」と「見越竹」と名前のついた立花図である。胴や見越に竹の枝を使うことで花形に厚みをつくっている。第四十六図では砂物らしく太い竹の株を見せたところに筍が伸び上がり、自然表現の面白みを存分に感じることができる。器の砂鉢が竹の根株を連想させる。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』（日本華道社刊）

『花道古書集成 第一期第二卷』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）

※立花図転載

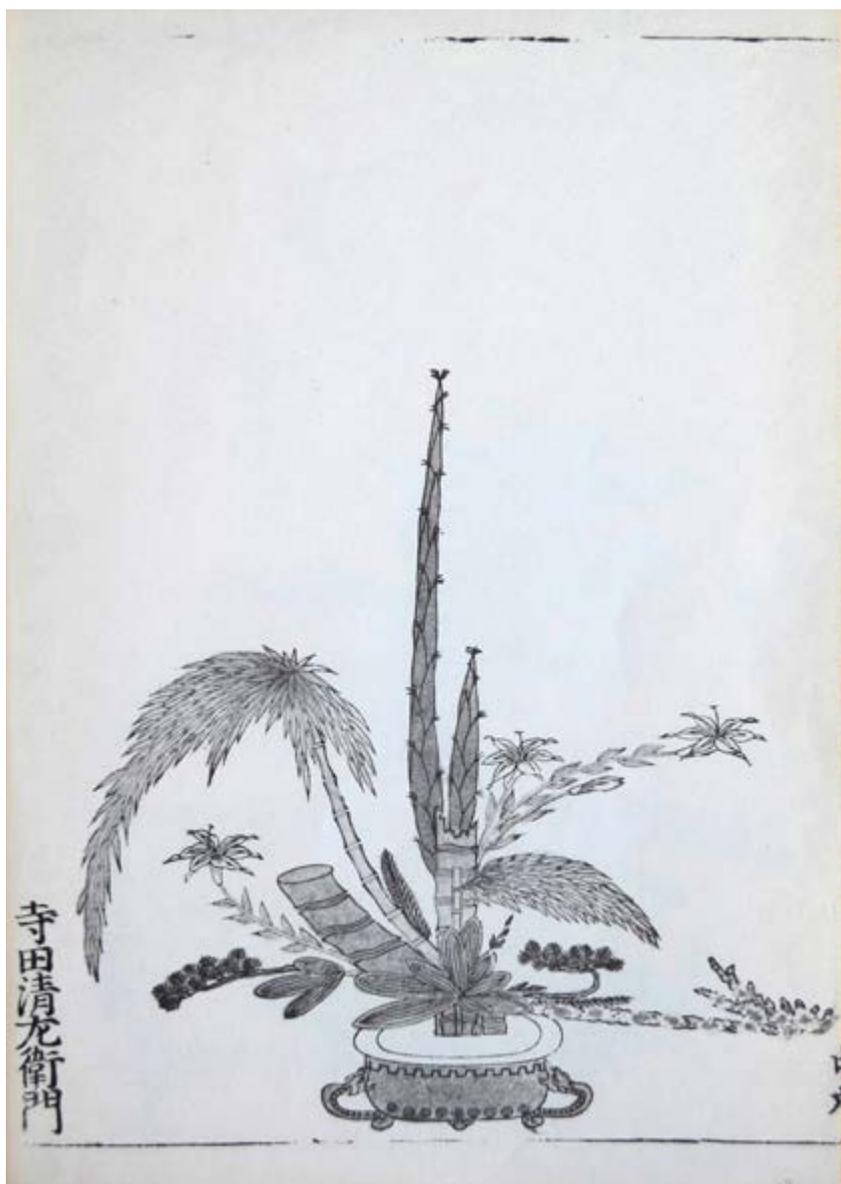
『華道古典名作選集 立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第四十六図

一株砂物 筍真

寺田清左衛門

筍 竹 百合 松 苔 熊笹 嫩





フユイチゴ 仙溪

花材 冬苺(薔薇科)

澹油(五加木科)

喇叭水仙(彼岸花科)

花器 陶花瓶

フユイチゴは蔓性の常緑小低木で、地面を這うように枝をのばす。夏から秋に白い花が咲き、冬に実が赤く熟して食べられる。ロシアアブラの白い枯葉を合わせ、「テイタテイタ」という名前の小さなラップアシセンを覗かせた。森の春の訪れ。

横から見た奥行き



レモンだより

この冬はカボチャのお家に。





竹の立花 △表紙の花▽

「富春軒初春の会」
挿花 杉浦慶弥

花型 直真(真の花形)
花材 真竹(稲科)

金明竹(稲科)

木瓜(薔薇科)

赤芽柳(柳科)

母(松科)

水仙(彼岸花科)

寿松(松科)

椿(椿科)

枇杷(薔薇科)

花器 銅立花瓶

タイムリーな竹の立花。清々しい。

南天なんてんの立花 △10頁の花▽

「富春軒初春の会」
挿花 桑原仙溪

花型 除真(行の花形)
花材 南天(目木科)

臘梅(臘梅科)

母(松科)

水仙(彼岸花科)

松(松科)

花器 銅立花瓶

ナンテンは「難を転ずる」縁起の良い木。

譲葉ゆづりばの立花 △11頁の花▽

「富春軒初春の会」
挿花 寺川慶枝



11 頁の立花



10 頁の立花



表紙の立花

横から見た奥行き

ユズリハは若葉が出たのを確かめるように落葉する。家が代々続くようにとの願いをこめて。

花器 天女模様銅器

枇杷 (薔薇科)
小菊 (菊科)

千両 (千両科)

梅 2 種 (薔薇科)

松 (松科)

花型 除真 (行の花形)
花材 讓葉 (讓葉科)



お紅茶の代わりに

櫻子

花材 ラグラス(稲科)

アネモネ(金鳳花科)

花器 ティーカップ

ヨーロッパの美術には多くのアネモネが出てくる。ルノワールやマチスも好んでこの花を描いている。花姿は今とあまり変わらないが、深みのある花色と姿の調和が絵になりやすいのかもしれない。

好きな花は小さくいけて、身近に置いて眺めていたい。大きめのティーカップを花器にして、食卓に季節の彩りを加えるように。

このカップは父が毎朝お紅茶を楽しんでいたもので、母と色違いのお揃いだ。濃いめに淹れたお紅茶にお砂糖とミルクをたっぷり入れて…。何でも沢山入れる父にはびつたりのティーカップ。春に実るラグラスとアネモネを飾った。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
3月号
No.657

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





純米吟醸「仙櫻」

偶然にも私達二人の名前が合わさったお酒をお弟子さんが見つけてくださった。但馬の国の長寿の桜養父市大屋町）がこの名前で呼ばれているそう。

兵庫県六粟市の山陽盃酒造の純米吟醸酒で、蛇紋岩米をフナ原生林の自噴水で仕上げ、明延鉱山坑道の地底に寝かせて熟成させるそう。自然の恵みが、人の手により発酵という過程を経て新たに生まれ変わる。お酒づくりも、人と自然の共同作業という点で、いけばなと同じだなと思う。

いけばなもいける人のイメージの醸成によってより深いものになる。



陶の深鍋

△2頁の花▽ 櫻子

花材 桃 (薔薇科)

スイートピー (豆科)

菜の花 (油菜科)

花器 足付陶水指

桃の節句には女の子の健やかな成



長を願いたい。お料理も好きになつてね。そんな願いを込めて、深鍋を模した水指に桃をいけた。

横から見た奥行き



果物とラン

△3頁の花▽ 仙溪

花材 シンピジウム(蘭科)

晩白柚(蜜柑科)

花器 手付陶水指

南国の蘭をいけて、横に果物を添えると絵になつてくれる。果物は珍しい品種か、もしくは特別に色鮮やかなものを選びたい。大らかなシンピジウムには晩白柚がよく似合う。

横から見た奥行き





横から見た奥行き

良い花材なら、2種の出逢いを生かすいけ方を考えていけてみよう。

花材 木瓜(薔薇科)
アイリス(菖蒲科)
花器 黒白陶扁壺

2種でいける

△4頁の花▽ 仙溪



横から見た奥行き

ランタンキュラスの新品種「ラックス」は花弁に光沢があるスプレー咲き。今後人気がでるだろう。

花材 ランタンキュラス(金鳳花科)
「ラックス・ピュタロス」
チューリップ(百合科)
花器 トルコ製真鍮ハケツ

ランタンキュラス・ラックス
△表紙の花▽ 櫻子

天台圓淨宗大本山
ろさんじ

廬山寺 節分鬼おどり

京都の廬山寺（廬山天台講寺）では、2月3日に追儺式鬼法楽（通称鬼おどり）が執り行われる。今年のご縁があつて、私と櫻子も豆まき役を務めさせていただいた。

人間の煩惱を表す赤、青、黒の鬼3匹が、邪気払いの弓矢と本堂での護摩焚きによって退散。その後境内に蓬莱豆や福餅がまかれ、それを参拝者が厄よけ開運を授かるために手を伸ばして取るうとする。

豆は「魔滅」に通じ、邪気を追い払って一年の無病息災を願う。

廬山寺はもともと比叡山延暦寺の中興の祖である良源により天慶元年（938年）に京都の北山に創建された。良源は元三大師（1月3日が命日なので）、慈恵大師（朝廷から贈られた名）、また角大師、豆大師、降魔大師、魔除大師など多くの名前で親しまれている。

魔除のお札「角大師」は鬼守りとも呼ばれ、良源が鬼の姿になって疫病神を追い払った時の姿。廬山寺には良源が使ったとされる「降魔面」が伝わり、節分に特別開帳される。

歴史ある行事に参加させていただけたことに感謝するとともに、皆さんの無病息災を切に願う。



角大師



立華時勢粧りっかいかいまいようすがたを読む ④

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづぎ)

仙人杖

非祝言。

本草綱目に云う、たけのこ筍竹に成らんと欲すと
き、立ちて死する(枯れる)者なり。俗に云う、
竹子おいどまりの枯れたるなり。立花、砂物
によるし。

鬼鍼きしん

非祝言。

竹のくろ根という。竹のかぶなり。砂物に
専ら用いる。

鞭竹むちのたけ
べんちく

非祝言。

竹の根ふちに笹の付けるなり。水ぎわに低
く用いる。竹五本とも遣いたる時は用つべし。
二本三本の内にては用捨ようしゃあるべきなり。

唐ささ くまざさ

祝言。水ぎわ。

やきばささとも云う。水際はかりに用いて、
前置にはならずと云う説あれど、今様には前
置に用いるをよしとす。両説なり。口伝。笹
は水をあげがたし。一日も間のある花ならば

用捨ようしゃすべし。冬はくるしからず。又笹の先切
る事一枚はゆるす。二枚と切るべからず。

第二十九図

立花 竹除真

除真の内草の花形 桑原次郎兵衛
竹嫩 枇杷 水仙 松 椿 柘植 梅 茗菰



先年、竹文化振興組合の季刊誌に竹について寄稿したので転載します。

「立華時勢粧」から

桑原専慶流十五世家元
桑原仙溪

いつだったか、馴染みの竹屋さんのTシャツに印刷されている数字を見て、びつくり仰天したことがある。「創業1688年」。その同じ年に、桑原専慶流の流祖・桑原富春軒仙溪が「立華時勢粧」を出版しているのだ。なんとという偶然だろう。そんな縁を思い出したので、「立華時勢粧」のことを書きたいと思う。

江戸時代の貞享5年、すなわち元禄元年に出版された「立華時勢粧」は木版による8冊本で、118の立花図が納められた「立花時勢粧」3冊と、立花の教えが詳しく書かれている「立花秘傳抄」5冊からなっている。

「立花秘傳抄」5冊のうち3冊には、立花に使われる花材の解説が述べられているが、その内容は次のようになっている。

常磐木の部(35種)
松、檜、柳、楓など。

花の部(23種)
桜、梅、桃、つつじなど。

実の部(14種)

水木、梅擬、おもなど。

通用物の部(30種)

竹、牡丹、藤、南天など。

草の部(82種)

杜若、百合、蓮、菊、水仙など。

このようになってはいるが、ある時は和歌を引用し、またある時は中国の文献から生花について述べ、それぞれの花材をどのように使うべきかが事細かく書かれている。

さて、それでは「竹」について何が書かれているかを一部ご紹介してみよう。

竹

祝言。上中。

竹の字、形に象りてこれを作る。

本草綱目に云う、竹葉必ず三つあり。枝必ず二つあり。その根好んで東南に行く。

戴凱之の竹譜に云う、植物(う

ゆるもの)の中、名あり、竹という。剛からず、柔ならず、草にあらず、木にあらず、云々、これ通用の證文なり。

戴凱之は中国南北朝時代(420~589)の植物学者で、現在の湖北省の人。「竹譜」という書物に竹の生花を詳しく書き残している。

その竹譜から引用しつつ、竹は「通用物」に入ると書かれている。

この通用物とは、江戸時代の花材

の分け方の一つで、草にも木にもなる花材のこと。

立花では

「木を山と見なし、草を野と詠め」

という教えがあるが、竹は山にも野にもなる重宝な花材というわけだ。

他にも竹の使い方として、

「葉は後ろ角へなびかせ、上の節より四五分の中にて一文字に切る」

「下は水際より四五分にて必ず節を見せる」

「竹の前に苔晒木の太く直なるを立てること古来より嫌う。竹をかくすのみならず、竹の直なると同意にて悪しし」

「竹の子は砂の物によるし。立花に立てる時は竹の真より高く立のぼすべし」

「砂の物には大竹を賞翫とす。太

き竹に葉の付きたるなき時は、生竹にても枯竹にても太きを立ておき、さて細き竹の葉茂りたるを立て添えて真に用うべきなり。三本つかう時は、さび竹、くさり竹、仙人杖、切株竹など取り混ぜて使うべし」

「竹は切つて根を焼きて立つべし。又上の節を抜きて水を入れて立つべし」

以上はごく一部だが、竹に対する

思いの深さを感じる。

仙人杖(おいしまりの枯れたもの)

や、鬼鍼(竹のくる根)、鞭竹(竹

の根ふちに笹のついたもの)も用いるとも書かれているが、私はまだいけたことがない。

さて現在、私のいけばなにおける竹については恥ずかしながらそれほど多くの経験がない。近頃は花屋に頼んで金明竹を時々いけてはいるが、金明竹は切つていけても葉が萎れにくく有難い。しかしながら、竹林が身近にない暮らしの中で、自分で竹を切つていける事は皆無に等しい。ご先祖様に申し訳ない限りだが、竹を交えた立花の幽玄さは、実際にいけてみないと味わえない。これからの私の挑戦課題である。

「温故知新」という言葉があるように、私はこの「立華時勢粧」を読み返しながら、「自然」と向き合う上での、新たな教えに出逢う楽しさを、今感じている。

最近私が特に感動した教えについて紹介しておきたい。

それは立花秘傳抄の中の「立花色の事」に出てくる。

立花 色の事

師に問う。立花色と云うはいかなる所を云うや。師の曰く、これ花道の興義、出生玄妙体を瓶にうつすを仮に名付けて色と云

う。その玄妙体とはいかなる所を云うや。師の曰く、柳は緑、花は紅。問うて曰く、いかがして指し得べきや。師語りて曰く、草木我が心にまかする時は工に貪著するゆえ、必ず出生の景氣得がたし。

また我が心草木にまかせて念慮なく、植に生ずるは植に、横に生ずるは横に遣う時は、草木自然の体頭かなるべし。

藁駝曰く、古文

「能く木の天に順ひて、以て其の性を致すのみ」(註①)

この語、花道の興義によく相叶なり。誠に微細の教導、向上の一路なり。この境をよくよく工夫して修練止まざる時は、覚えずして色あるべし。

この中の「藁駝の教え」は中国中唐の文学者、柳宗元の「種樹郭橐駝傳」(註②)の引用だが、中国で生まれた千数百年前の珠玉のメッセージを、流祖を通じて受け取ったみたい

いな、不思議な縁を感じている。多くの人に知ってほしい内容なので。

「種樹郭橐駝傳」はインターネット上の、「小林益夫・風幡亭雑記帳」にその全文が紹介されているので、一読をお勧めすることで、寄稿の締めくりと致します。気付きを共有できますことを祈って。

註① 意識「木の天然自然に従って、その生まれもった生きる働きを導くことをしているだけである。」

註② 全文を「テキスト632号」に掲載しています。



サザンカ

仙溪

花材 山茶花(椿科)

花器 環付銅花瓶

「京都名流いけばな展」 出作品

2月に若生した古木の山茶花を生花に付けて出品したので、記録として掲載しておく。

サザンカは秋のはじめに咲きたして、冬の終わり頃まで長い間咲き続ける。他の花がほとんど無い時季に咲いて、私達の心を温めてくれる、そんな花である。

立花の場合、サザンカはツバキと同様に前置などの下段に使う。上段の役枝に使っても、あまり良い感じにはならないものである。

生花の場合も秋の実ものや、冬の柳などの根締めにしたりするが、ある程度立派な枝であれば一種でいけて、サザンカの風情を楽しむことができる。

写真では枝葉の整理が足りないように感じるが、自然の勢いを優先している。古風な銅器とも合っていたが、口が小さいため水の減り方が早く、毎日通ったけれど常にベストな水量を保てなかったことが反省点である。やはり生花は水面から立ち上る水際が大切な見せ場なので、花器の選択にも注意したい。



啓翁桜

仙溪

花材 啓翁桜（薔薇科）

花器 煤竹竹筒

ケイオウザクラは中国のミザクラ（実桜）を台木にして、ヒガンザクラ（彼岸桜）を接ぎ木した中から、枝変わりとして生まれたそうだ。いわば日中合作の桜である。

私達が日頃いけている花の多くも、元は様々な国の自然が、様々な国に渡り、様々な人によって作られてきたものである。トマトやジャガイモやカボチャといった野菜と同様に、それぞれの来歴を辿ってみると、世界各地の自然とつながりがあるて面白。

野菜を違う土地で育てると形も味も変化して、産地ごとに独特の品種が生まれたりする。植物は環境に適応するための努力を惜しまないということか。

私達人間も違う国の文化と融合したり、他国で自分自身が変化するのを感じたり、植物と同じだと思っ。自国の文化を守ることも大事だが、進化するための変化もまた大切だと思う。



横から見た奥行き



出逢い花 (31)

仙溪

油瀝青 (楠科)

椿 (椿科)

花器 陶扁壺 (八木一夫作)

久しぶりの出逢い花。

アブラチャンのひねた枝に赤椿を
出逢わせた。

アブラチャンはアオモジやクロモ
ジと同じくクロモジ属の落葉低木だ
が、花材として出るのは稀なようだ。
跳ねるような枝の形がくつきりと見
えるようにいけている。

ずんぐりした器は片側が少しへこ
んで、金環食と名付けられた円が黒
い線で象嵌されている。小指が入る
くらい小さな口なので、出逢い花む
きの器である。

金環食とは日食のこと。太陽に月
が重なる稀有な現象を器に描くこと
で、神秘的な力を与えているように
感じる。こういう器には味わい深い
自然をいけたいと思う。

横から見た奥行き





スネークボール 櫻子

花材 アリウム・スネークボール

(百合科)

シキミア(蜜柑科)

花器 赤黒ガラス花器

はじめは3種でいけようと考えていたが、アリウムの曲がりくねった茎の重なり合いが思いの外面白かったのので、赤いシキミアとの2種で赤い器にいけ、構成も色彩もシンプルにまとめてみた。

横から見た奥行き



レモンだより

新聞を読む邪魔をするのが好き。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
4月号
No.658

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





(表紙のいけばな解説 15頁)

imagin イマジン

今年の華道京展のテーマは「イマジン」。想像する・心に描く、という動詞である。

花をいけると、どんな場所にどんな器でどんな花をと、まず心に想い描くのが出発点だ。そして花の気持を想像しながらいける。そう、まさしくイマジンに欠かせない。

「想像の翼をひろげる」と、NHKの朝ドラ「花子とアン」で主人公がよく口にしていたのを思い出す。「赤毛のアン」を翻訳した村岡花子の物語だった。不安を抱く苦境の中で、主人公は想像の翼をひろげて前へ進む。想像の翼は未知の世界への扉を開く勇気を与えてくれる。

ジョンレノンのおまりにも有名な曲「イマジン」。彼は歌の中で、戦争の無い世界を想像してごらん、と語りかけてくる。平和を手に入れるには一人一人の想像力が鍵となる。

こうありたいと想像することで勇氣や希望が生まれ、相手のことを想像することで優しい気持ちになれる。イメージすることの大切さを感じる。

今回の華道京展で、どんなイメーヂの世界に出会えるか、皆さんの花が楽しみだ。

くろめやなぎ あずきやなぎ
黒芽柳と小豆柳

^ 2頁の花 ^ 仙溪

花材 黒芽柳(柳科)



横から見た奥行き

ものは種類が年々増えている。
シダ類のアンブレラフアーンも傘の様な面白い形で洋とも和ともつかない不思議な雰囲気だが、全体に瑞々しさを与えてくれる。

花器 青色ガラス鉢

オーストラリアから輸入される葉

アンブレラフアーン
(裏白科)

花材 カラー (里芋科)

ランキユラス (金鳳花科)

アンブレラフアーン

△3頁の花▽ 櫻子



横から見た奥行き

2種の柳を混ぜていけるのもいいものだ。アネモネが良く似合う。

花器 ガラス花器

アネモネ (金鳳花科)

小豆柳 (柳科)



ヤマボウシ

仙溪

花材 やまぼうし 山法師 (水木科)

アリウム・ギガンチウム

(貝母科)

擬宝珠の葉 (百合科)

花器 陶花器 (前田保則作)

昨年6月にアメリカのヨセミテ国立公園を訪れたとき、野生のハナミズキの純白の花に迎えられた。花の時期は過ぎていたが、葉が茂る中心とさわ大きく咲いた花は神々しかった。

ヤマボウシはハナミズキの近縁種で、日本の山の谷間に生える。中心の花を法師の頭に、白い総苞を頭巾に見立ててこの名がある。やはり神聖な雰囲気の花である。

ギガンチウムを人と見ると、花山に分け入る山法師というところか。



ヨセミテ公園のハナミズキ



横から見た奥行き



ブルビネラ

〈表紙の花〉 櫻子

花材 ブルビネラ(ツルボラン科)
 シーグレープ(蓼科)
 トルコ桔梗(竜胆科)

花器 盃型ガラス花器

春の到来を告げる南アフリカ原産のブルビネラ。オーニソガラムなどにも似ていて、目立った特徴も無く平凡な花と思っていたが、この春一番に入ってきたものは、カラフルで背も高く今までと違う花型にもなった。一本の花からは何百輪も花を咲かせるらしい。そのせいか花を支える茎がしっかりと固くて長くいける



横から見た奥行き

ことも出来る。

白、黄、ピンク、オレンジ、朱赤と少しずつ違う色を買い求めていけてみた。足元にはシーグレープ(浜辺葡萄)の葉とグリーンのトルコ桔梗を。シーグレープはカリブ海などの海岸地帯に自生するタデ科の木だが、白い花を咲かせ紫色の実がなるのでこのように呼ばれている。フレッシュな切り枝を使えるようになったのは最近の事だが、微妙な色と赤い葉脈が美しい葉だ。花器や敷物の色も加えて渋い赤でまとめてみたいと思った花。

【記録】

京都東山花灯路

「いけばなプロムナード」

前期 3月9日(金)〜13日(火)

会場 春光院前

出品 桑原仙溪

青い惑星のような丸く大きな器に、赤花のカラモモ(唐桃)の太枝をいけた。以前、西吉野の花木の産地を見学した時に、低く横に手を広げるようにカラモモが育っていた。普通の桃と違って、枝がごつごつした感じである。いつもは瑞々しい葉をもつ花を合わせるのだが、今回は敢えて一種でいけてみた。唐桃(からもも)一色というところか。



レモンだより
 食卓の花を愛でるレモン師匠。



立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ④

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

牡丹

祝言。上中。

異名 木芍藥もくしやくやく 百両金ひやくりようきん 国色こくしよく 醉西施すいせいし

和名 ふかみ草 はつか草 てるほ草

名とり草

万葉

名ばかりは咲ても色もふかみ草花咲くならばなににしてまし

藏玉集

折人の心なしとや名とり草花見るときはとかくすくなし

群花品の中に牡丹をもつて第一とす、ゆえ花王という。その花芍薬しやくやくに似て、宿幹しゆくかんは木に似て、もつて木芍薬と名付く。通用の証文なり。

牡丹、毎年十二月の数に応じて花のしべ十二

あり、閏年うるうとしには十三あり、故に十三紅という。

牡丹は午うまの時に花殊こぼに盛んなり。故に猫を繫つなぎ置きて時を知る。

歌に

六つ丸く五七玉子に八と四は梯のきねなり九つ針

第九十四図

立花 牡丹除真
牡丹の心(真) 桑原次郎兵衛
牡丹 藤松 柘植 躑躅 細苔 熊笹 鳶尾



牡丹は花王と云い、名を貴び、高位高官の御方にて宗匠のほか、門弟の指すことをゆるさず。古代は花大切なるゆえ、木を残して茎より切り、筒に入れ、胴どうに用いて請副うけまへに使わず。誠に立花の道理でもあるべきことなり。しかれども近代、心請添しんけいぞえに用いるは、世上沢山にて時相応なるべし。

藤の花

祝言。上中。

紫藤 むらさきのはな 招豆藤 しやうまめとう 珠藤花 しゆとうか

和名 二季草 春より夏に咲からるによりてい

う 松見草

蔵玉集

夏色の花や侍らん二木草松の下枝にかか
る名なれば

同

そよやけふおりあふ春もくれにけり松見
草にも花咲きにけり

本草綱目に草木の部を除いて藤のぞの部に入た
り。又歌書にも草の部に入る。徒然草には草

は藤、山吹などあり、立花の上にては通用
に使うなり。すべて蔓の類は皆通用なり。ほ
かこれに比なぞえて知るべし。

第九十二図

立花 藤除真

藤の心(真) 一步子(初版では富春軒)

藤 松 檉木 躑躅 柘榴 小菊 鳶尾 嫩



一步子

比なぞえて||なぞらえて

藤にいたみたるは藤に(よつて)傷んでしまった。

藤に立てる松は、心、請、副、控枝にかぎらず、幹みきくるい枝葉古めき老いたる松の、藤にいたみたる風情ならでは景気うつりがたし。これ一つの習いなり。

藤は木にたより、松にまといて生える物なれば、瓶に立てるにもその姿を専らにする。心請、控枝、の内いずれの枝にても、一重二重まわして出生をあらわす。しかれども松、藤、の二木取り合いよくかない、自然の景気うつらば、一重二重にかぎるべけんや。

松に藤をまといせんと思わば、藤のつるを多くあつめ、松の幹にとり合わせ景気相応したるを用い、扱さ花は木かげよりあしらい出して、たよりたる体を指さず。

藤のしだれ、瓶の口より下がりても苦しからず。一切のしだれ物、指し合いなり。紫藤を指す時は杜若は白きを用うべし。

牡丹が貴重な花なので、短く切って使うべきなのを承知の上で、近年は栽培が盛んになったので真に使っても良いのではと、独自の判断を述べている。九十四図が秘曲の図の中の「牡丹の心」である。

藤は5つの図に見られ、「牡丹の心」にも白藤が使われている。

九十二図も秘曲の図で「藤の心」と名がつく。S字に昇る蔓を真にして中段に白藤が下がる。赤とピンクのツツジが彩りを添えている。

二十七図は松枯れの真に藤の枯れ蔓をまわりつかせ、自然の厳しさを感ずる独特の景色が見事だ。副と見越に紫の藤が垂れ下がり、流枝と請を兼ねた松が立ち昇る。その対比に植物の命が漲みなぎっている。

第二十七図

立花 藤除真

除真の内草の花形 坂田任性

藤 晒木 松 柘植 躑躅 檜木 小羊園





桜と連翹の立花

仙溪

花材 啓翁桜(薔薇科)

連翹(木犀科)

照り葉椿(椿科)

椿(椿科)

繪葉(繪科)

喇叭水仙(彼岸花科)

小菊(菊科)

花器 銅立花瓶

NHKで東北の桜をテーマにした番組を見た。北国では桜の開花を心待ちにする気持が強く、多くの桜の名所を生んできた。その桜の周囲には黄色の花が咲いている。菜の花や連翹だ。黄色は春の温もりを感じさせてくれる。

立花時勢粧では、桜には他の花の咲くものを交えないこととされているが、彼岸桜や啓翁桜のような小輪の桜には品良く春の花を添わせたい。山里の春を想い描いて、啓翁桜と連翹を主な役枝に配して立ててみた。

春の立花では正真の花に悩む。桜の立ち枝や伊吹などを正真にしてもいいが、今回は人里の庭に咲くラップサイセンにした。

横から見た奥行き





山茱萸とアマリリス

仙溪

花材 山茱萸（水木科）

アマリリス（彼岸花科）

花器 陶花器

上級者向けの稽古の見本にいたした投入。何日か経って花が咲いたところを写真に撮った。蕾の時には無かった華やきが感じられる。

山茱萸は太くて力強い枝だったが、合わせたアマリリスも負けていない。原産地こそ東アジアと南アメリカで異なるが、どちらも春の花同士なので違和感はない。

アマリリスの花の茎は空洞なので、茎よりも長い割り竹を入れて支えにしている。

2種だけでいけるには、花器の口元をどう見せるかがポイントとなる。

横から見た奥行き





啓翁桜とチューリップ

仙溪

花型 生花 株分け

花材 啓翁桜 (薔薇科)

チューリップ (百合科)

花器 小判型陶水盤 (伊藤典哲作)

春の公園で見かけるようなとり合わせ。生花にもそんな楽しみ方があっていい。啓翁桜を主株に、チューリップを子株に付けて株分けにした。

剣山で枝物の生花をいけるのは、かえって難しいかもしれないが、太めの幹をうまく使えば足元も整いやすい。水盤にいけることができ、花器の選択の幅がひろがる。作例のように株分けで季節の草花を合わせることもできるので、時々は稽古しておきたい。

横から見た奥行き





花器の選択 仙溪

花材 オクロレウカの葉(菖蒲科)

アイリス(菖蒲科)

宿根スイートピー(豆科)

花器 紺色釉陶鉢

紺色の鉢がうまく合ってくれた。この花器は父も好きでよく使っていたが、花の色彩を鮮やかに見せてくれる。また葉の緑も優しく感じられる気がする。器によって花の印象は違ってくる。

土っぽい自然な風合いの花器に比べると、花は素朴な自然の表情を見せてくれる。また、艶の有る釉薬の施された器に比べると、少し余所行ききの表情になる気がする。そしてその色によっても味わいが変わる。

自分が表現したいのは何か。どんな味わいのいけばなのかをはっきりさせて、それに合った器を選びたい。

紺色の器に黄色のアイリスが映える。宿根スイートピーは別の木の枝で支えていけている。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
5月号
No.659

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ビバーナム スノーボール

△表紙の花▽ 櫻子

花材 ビバーナム (忍冬科)

鉄砲百合 (百合科)

レナンセラ (蘭科)

花器 赤色釉花器 (宮本博作)

長くて綺麗なビバーナム。こんなに長くいても一週間しっかりと元気に咲いてくれた。足元を割り皮を削ってしっかりと剣山に挿す。水は毎日足して出来るだけ澄んだ深水にしてあげる。

一週間後には他の花も切り詰めて短く投げ入れに生け替えたが、まだ日持ちしてくれている。

ビバーナムは水が下がりやすいと言われるが、花が機嫌良く心地良ければ長く楽しめる。アジサイに近い花でオオデマリにも似ているが葉が柔らかく瑞々しい。花は緑色から白へと変わっていく。倉敷のお弟子さんが四月の花会でいけておられたビバーナムは大きくて真っ白のアジサ



横から見た奥行き



横から見た奥行き

イの様だった。ヒョウタンボクの間から溢れる様に咲くフワフワのビバーナムが印象的ないけばなだった。

シヤガの葉

△2頁の花▽ 仙溪

花材 アガパンサス (彼岸花科)

薔薇 (薔薇科)

著我の葉 (萱蒲科)

花器 粉引陶花器 (伊藤典哲作)

シヤガの葉には独特の美しさがある。作例のようにシヤガの葉を伸びと伸びとつけて、優しい雰囲気の花を添えると、その花の葉のように見えて自然な感じになる。

白花のアガパンサスと赤いバラだけでもいけられるけれど、そこにシヤガの葉が加わるとより生き生きとして見える。そんな効果を狙う時は、投入で前方へ張り出し、高さをおさえるようにすること。そうするとシヤガの弾む動きが生きてくる。

ルピナス

〈3頁の花〉 仙溪

花材 ニューサイラン(竜舌蘭科)

ルピナス(豆科)

リュウココリーネ(百合科)

花器 赤ガラス花器(ウルリカ・

ハイドマンヴァリーネ作)



ルピナスの仲間には南北アメリカ、地中海沿岸、南アフリカに200種以上が分布するマメ科の植物で、その姿からハウチワマメ(葉団扇豆)、ノボリフジ(昇り藤)などの和名がある。花穂が立派なラッセルルピナスという品種がよく花壇に植えられるが、切り花で華奢な品種のルピナ

スを見つけたので初めていけてみた。葉の水揚げはいいとは言えないが、青に赤がのぞく花色が美しい。不思議な絵のガラス器に個性的な花と葉を3種とりあわせていけると、何やらガラス器の絵たちが踊り始めそうな気配。花と器で物語が出来る上がる、そんないけばな。



横から見た奥行き

ウルリカさん

これは、両親と1993年にスウェーデンを訪れ、コスタボダ社の専属ガラス作家であるバリーン夫妻のお宅に招かれた時の写真だ。バリーン氏とウルリカさん、そして両親と、言葉はなくてもお互い表現者同士、自然に気持が通じ合っているのを傍に感じて。バリーン氏のガラス作品は神秘的な美しさ。ウルリカさんの描く不思議な人や動物たちは、奇妙だけれど温かな愛に溢れている。彼女の器は、想像し表現することの大切さを教えてくれる。交流の中での色々なエピソードを思い出す。そんなウルリカさんが先月亡くなられた。謹んで哀悼の気持ちを届けたい。



横浜の西洋館に春をいける
 4月1日～2日 外交官の家 挿花13名



立華時勢粧りつかいまようすがたを読む ④5

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

南天

祝言。上中。

その実赤うて燭火のごとし。ゆえに南燭なんしよくと名付く。

本草綱目に曰く、その種しゆこれ木にして草に似たり、ゆえに南燭なんしよく本草と名付く。

沈括筆談しんかつひつだんに曰く、南燭は草木本草および伝記説くところ人少なく識者云々。これ立花通用に使うの証文明らかなり。

異名 南天竹 蘭天竹 草木の王

南天は心請副に立てる時、かならず風をもたすべし。口伝。

南天の正心は葉の廻りちいさき実の自然と立ちたるを用うべし。



第五十三回

立花 松除真
松尾清左衛門
松 南天 栢植 水仙 檉木 千両 柏嫩

南天の実を使うは一瓶に三房五房、あるいは七房八房つかう時は、長短前後たて横と並びかし使うべきなり。

ある師の曰く、南天と竹と、しだれ物にて嫌うといえど、しだれざる実を使う時は苦しからずといえり。しかれども竹は四季の景物なり。南天は当季の珍花なり。竹の緑のなびきたるを愛して、南燭の紅にしだれたるをわざとに立て見んも、花道の正道にあらず。

南天の胴作りという事は、古人も指しもらしたる花形なり。しかるに出生を考え、法度をよけ、花形あしらい等を工夫してあらたに指しそむるものなり。



第七十一図
立花 南天除真
竹葉軒治兵衛
南天 松 晒木 菊 小菊 柘植 椿
檜木 嫩

わざとに立て見んも花道の正道にあらず。|| わざと立ててみないのは花道の正道ではない。

「南天は真、請、副に立てる時、かならず風をもたすべし」とはどういう意味だろう。風を感じるように空間を空けるということか。絵図を見てみると、南天の葉や実がたとえ風に揺れても、他の花に当たらないくらいの場がとつてある。

「南天の胴」は前例が無かったけれど、花形やあしらいを工夫して始めて立ててみた、と富春軒は書いている。そしてその絵図が第九十一図である。胴の南天はおそらく前方へ出ている。その出口を栞で隠すのみのシンプルな胴である。南天の葉の広がりや実の姿をすっきりと見せている。また、胴の南天の葉が広がるので、請上がりにして空間を空ける工夫がされている。さらに請と控枝の南天はどちらも変化のある曲がり方をしており、中央で構える南天の胴との対比に面白みがある。そのあたりが、「南天の胴」の肝ではないかと思う。

参考になっている「沈括筆談」について調べてみた。沈括（1031、1095）は中国、北宋の科学者、政治家で浙江省の出身。博学に加えて、従来の知識人がほとんど注意を払わなかったり、記録しておかなかった事柄にも多様な関心を持って多くの著述を残した。「沈括筆談」の内容は多岐にわたるが、特に自然科学と技術の記述は、中国科学技術史上、注目すべき内容と価値を持つ。沈括が晩年を過ごした江蘇省鎮江の夢溪園の名をつけて「夢溪筆談」とも呼ばれる。沈括も富春軒仙溪も、自然を自ら感受しその真理をつかもうとする姿勢が共通しているように感じる。

※参考文献

- 『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』（日本華道社刊）
- 『花道古書集成 第一期第二巻』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）
- ※立花図転載
- 『華道古典名作選集 立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第九十一図

- 立花 松除真
- 南天の胴 富春軒
- 松 伊吹 晒木 南天 柘植 小柏
- 小菊 著我





ツクシドウダン

仙溪

花型 生花 草の花形 副流し
 花材 ツクシドウダン 筑紫満天星(躑躅科)
 花器 銅花器

ドウダンツツジは山地の岩場、特に超塩基性の蛇紋岩地帯に多く見られる。日本は概ね弱酸性の土壌なので、蛇紋岩のような特殊な地質で育つ植物は限られる。そのドウダンツツジの中のサラサドウダンの仲間にツクシドウダンがあり、九州の筑紫山地に見られるのでこの名がある。花は鐘状で花冠が深く5裂する。

華道京展では投入にしたが、一種で生花にすると、幹の姿が見えて又別の趣になる。

横から見た奥行き



①



②



第69回 華道京展
「イマジン imagine
〜心に描く花〜」

会期 4月5日〜10日
会場 大丸ミュージアム〈京都〉



④



③

桑原素溪 (写真④)

藤 松の晒木

煤竹掛花器

テーマは「イマジン」。見る人のイメージが膨らむようにと、花材の生育環境にこだわって、前期は熱帯に育つ植物、後期は日本で育つ植物をいけた。また、同じ作者の花器を使ったので、花席全体の雰囲気統一感が生まれた。前後期で近藤豊さんの器を3つ使ったが、洋でも和でも似合う大好きな器だ。私の花は同じ花器に異なるいけばなをいけている。器の懐の深さを感じる。

健一郎は藤に初挑戦。山の藤は松によじ昇り、藤がからみついた松は変形を余儀なくされる。そんな自然を松の晒木を使って表現してみたい、と言っていた。彼渾身の一作。

レモン日より

彼に友達ができました。最近わかったのですが、男の子です。





出逢い花 (32) 仙溪

ベル鉄線 (金鳳花科)

利休草 (百部科)

花器 手彫磁器 (南繁樹作)

この花は最初に花器を決めていた。幾何学的な手彫り模様が美しい磁器で、口を尖らせた白い果実のようだ。小さな口でもいけられる茎の細い花材を探しに花屋へ行った。

まず木立性のベルテッセンを見つけたが、出逢わせる相手が難しい。出はじめたばかりのリキユウソウにふと目が止まる。

リキユウソウもかなり茎が細い。本来の名前はビヤクブ(百部)。中国原産の蔓性の多年草で薬用植物の一つである。夏でも元気に水揚げしてくれる丈夫な切り花として生産が増えてきているようだ。

リキユウソウの葉の茂みがベルテッセンを支えてくれる。よく見ると小さな花が咲いている。ベルテッセンと同じ4弁花だ。偶然の出逢い。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
6月号
No.660

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ライラック

^ 2頁の花 ^ 櫻子

花材 ライラック (木犀科)

アマリリス (彼岸花科)

フィロデンドロン・レモン

ライム (里芋科)

花器 オレンジ色ガラス花器

ライラックの花弁の一つ一つは小さいのに、穂の様に集まって咲く姿を見ると心がとても豊かになる。色も綺麗で甘くて上品な香り、家族が好きだった花だけにこの季節は必ずいけて飾りたい。

切り花のライラックは一本立ちで売られる事が多いので、花型が単調になりやすい。たっぷりと厚みのある花姿になるようにいけてゆく。

水あげが悪いので、まず足元の皮を削り、さらに割って中心の髓をハサミで削り出す。そうしていけると良く日持ちしてくれる。

バラと合わせる事の多いライラックだが、細くて品の良いアマリリスといけた。レモンライムの葉を添えて。

横から見た奥行き





食卓の花

△ 3頁の花▽ 櫻子

花材 縮太藪しぼふとい (蚊帳吊草科)
満天星まんてんせい (躑躅科)

都忘れ2種 (菊科)

花器 カットガラス舟形花器

どこから見ても綺麗な食卓の花。シマフトイが軽やかで涼しそう。長くいけてもお料理の邪魔をしないように控えめに。四方正面で。



横から見た奥行き

レモンだより

友達のことをプーちゃんと呼ぶことにしました。(右がプーちゃん)





姫空木とベル鉄線

櫻子

花材 姫空木（雪の下科）
ベル鉄線（金鳳花科）
花器 丸紋染付花瓶

野に咲く小さな花を摘んで帰りたい、そんな気分に合わせてくれる野趣のある可愛らしい花材に出会えると、つい買ってしまふ。ピンクのヒメウツギやベルテッセンもそんな花の一つだ。

ウツギは茎の中心が空洞なことから空木と名が付いた。ウノハナ（卵の花）とも呼ばれ、卵の花月とは陰暦の4月のこと。今の5月にあたり、丁度ウツギがいつせいに咲き始める。ウツギの名がついた植物は多い。ある種のウツギは材質が固くて木釘の材料になる。花器の桐箱の木釘に使われているそうさだ。

幾何学模様の染付花瓶で、全体に抑揚を与えている。

横から見た奥行き



花菖蒲と紫陽花

表紙の花 櫻子

花材 花菖蒲2種（菖蒲科）
オクローウカの葉（菖蒲科）
紫陽花（紫陽花科）
花器 オレンジ色ガラス花器

今年には花菖蒲の季節が早くやってきた様な気がする。4月末には早咲きの薄紫色に加えて白や濃紫色も売られ、華やかなお節句を迎えられた。茎が太いものは殆ど3番目まで咲いてくれた。萎れた花の隣に次の花が出てくるのは嬉しいものだ。

勢いある葉はオクローウカだ。ピンクのアジサイを足元に集めると、オレンジ色の花器と一体になつてくれた。



横から見た奥行き



立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

小しだ

祝言。水ぎわ。

小貫衆こしだ(多識)。虎巻しだ(同上)。齒朶しだ(同上)。

小しだ通用に立てる。道理いかんと云うに、出生小草にして四時しほまず。春若葉を生ずといえど、古葉おちずして下葉より次第に枯れる。常に山木岸頭がんどうにはえまじりて、郊野こうや沢辺に生ぜず。これ草にして木にまじゆるの道理顕然なり。しからば何ぞ草にまじゆるや。いわく、出生もと草なるゆえこれをゆるす。古来の法なり。

小齒朶は三ヶの前置のその一つにして、秘伝あまたあり。今度に記しがたし。

小しだは立花第一のたすけにして四時用ゆるに、するどなる苔晒木をよくやわらげ、黄楊つげ引



第八十八図

立花 晒木直真

小しだ前置 桑原次郎兵衛

晒木 伊吹 梅擬 松 苔 柘植 小羊齒

躑躅 嫩 柏 檉木

「小しだ前置」は「おもと」「小しだ」「松」の「三ヶの前置」の一つで、「立花時勢粧下・秘曲の図」の中の第八十八図がそれにあたる。

小羊齒は立花第一の助けとなつて四季に使い、苔木や晒木の鋭さを和らげ、強々しい柘植や松の艶となり、窮屈な水際をくつるがせ、だらしなさを引き締めてくれる。木にも草にも相性がいよい優れものとしている。

松のこわごわしきにはつやとなり、水ぎわしま

りたるに優ゆうをあらせ、くだけたるをかたくな

し、裏の白きは下草の色を切り、木にあい、草

によるしく、水ぎわに指さで叶わずは小しだな

り。東国のかたには小しだのなき里もあるとき

けば、水ぎわこそとおもいやり待る。

前置には七枚九枚および十一枚まで用うべ

し。常の水ぎわには、二枚三枚遣うて意気はづ

みを専らに指す流もあり。又五枚七枚遣うて、

自然体を専らに指す流もあり。その変わりあり

といえども、妙所一にして修練なくては指し得

がたし。

小しだとくま笹と両方に指す時は、小齒朶表

ならばくまざさ裏葉を見すべし。景気同意なる

事を嫌う。

しだ火にてよくだまるものなり。葉三枚遣う

時は一本に一枚二枚ずつ付けて遣うべし。五枚

七枚も又この如し。裏表共に葉のなびきを見て、

さかしまにならぬ様に遣うべし。

萩

祝言。上中。

順和名、茅ぼうの字を用う。

和名、月見草。鹿鳴草。玉見草。秋遅草。

天智天皇

けふやかて露も色有初見草きのうの夢の

萩とおもへは

花尽異名

花咲はつれなき人も紅染草色にめてつる

けふやとふらん

藻塩草に顕昭法師の云う、万の草は枯れて、

春よりもえて花もさくに、古枝に葉もめぐ

み花も咲、それを木萩という。万葉集に真萩

と書きて木の部に入たり（下略）。これ通用

の証文なり。

通用の証歌

宮城野の露もいろある古枝草此年の秋も

花はさきけり

酴醾やまひぎ

祝言。上中心にならず。

順和名草の部に入。

異名、棣棠花。地棠花。

和名、かがみ草。面影草。

古歌

古里の面影草の夕はえやとめしかか見の

名残ならまし

同

おもかけをたかいにとめし鏡草忘れ衣の

形見ならまし

多識曰く、款冬かんとうは露ふきの臺とうの事なり。しかれ

ども古人万葉集中におおく山吹を詠して款冬

の字を用いる。又朗詠集これに同じ。あやま

りなりとぞ。

庭桜

祝言。上中。

心にならず。本草綱目、朱桜。

てまりのはな
粉団花

祝言。上中。心にならず。玉繡花ぎよくじゅうか

小手まり

同前。

こめやなぎ
米柳

祝言。上中。心にならず。

小米花

同前。

黄梅

祝言上中。心にも用いる。

連翹

上(右)に同じ。

第三十七図は真に黄梅おうばいの枝垂れが大胆に使われている。副の個性的な紅梅との対比で、黄梅をより優美に見せている。花材の個性を存分に生かす工夫を感じる。富春軒が大切にした「自由」がここにある。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』(日本華道社刊)

『花道古書集成 第一期第二卷』(大日本華道界刊 思文閣出版刊)

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』(思文閣出版刊)

第三十七図

立花 黄梅除真

東湖軒(初版は富春軒)

黄梅 水仙 柘植 椿 梅 ひさかき 苔





キヤスケードタイプ

仙溪

花材 薔薇(薔薇科)

キヤスケード・シンビジウム

ム(蘭科)

アスパラガス・スプレング

リー(百合科)

花器 陶花瓶(加藤敏雄作)

この枝垂れた蘭は、キヤスケードタイプのシンビジウムで、途中で曲がった長い茎に10輪ほどの花が程良い間隔についている。なんとも優美な姿である。

キヤスケード(カスケード)とは階段状に連続する滝を意味し、滝状に垂れた姿を表す言葉になっている。花嫁が手に持つのはキヤスケード・ブーケ。懸崖菊もキヤスケードタイプと訳される。

蘭の色が引き立つように青い花器を選び、大輪咲きの赤バラを合わせて、スプレングリーで両者を繋げた。

横から見た奥行き





うけざきおやまれんげ
受咲大山蓮華

仙溪

花材 受咲大山蓮華 (木蓮科) もくれん

姫百合 (百合科)

花器 青白磁花瓶 (市川博一 作)

めったにいけられない花材にオオヤマレンゲがある。奈良県南部の太峰山たかねに自生し、香りの良い白い花を横向きもしくは下向きに咲かせる落葉低木。花の大きさは5〜10センチ。水揚げが難しく、お茶席で小さく一種いけにされる貴重な花だ。

もう少し大型の花が上向きに咲くのはウケザキオオヤマレンゲである。こちらは中国原産の落葉高木で、ホオノキ (朴木) とオオヤマレンゲの雑種だそうだが、稀にいけばな花材としてオオヤマレンゲの名前で売られている。

作例は太枝だったので長く保つてくれて、後ろに見える蕾も咲いてくれた。一種では寂しいので、姫百合をとり合わせ、深山の香りを楽しんだ。

横から見た奥行き





華鬘草 けまんそう

仙溪

花材 クレマチス・エレガフミナ

(金鳳花科)

華鬘草 けまんそう (罌粟科)

花器 銀彩陶花器 (森野泰明作)

ケマンソウは中国原産の多年草。花の形が団扇の形をした仏堂の荘厳具、華鬘けまんに似ることから名前がついた。でも、別名のタイツリソウ(鯛釣草)の名前の方が馴染み深いかもしれない。

そして濃い紫色小輪のテッセンはクレマチス・エレガフミナ。繊細な茎の先に次々に花を咲かせる、エレガントな花だ。

銀色の滝のような、爽やかな瑞々しさを感じる森野さんの小品花器に、この2種の花を挿した。どちらも普段はあまり見かけない花同士。こういう粋な器が似合う。

横から見た奥行き





七竈ななかまどの生花

仙溪

花型 草型そう 副流ぞえなが

花材 七竈しちそう(薔薇科)

花器 雲藍條文花器(森野泰明作)

この花器に水を張ると、山深い谷川の、心地よい風が吹いてくるように感じる。その心地よい水面を見せるいけ方が生花であり、立花であるとも云える。ナナカマドの若葉の清々しさが器に映える。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
7月号
No.661

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ケンちゃん

「6月6日はいけばなの日」とは、何事も6才その目に稽古を始めるといいという故事からきているが、甥の健一郎(ケンちゃん)が素子先生(ホッホちゃん)にいけばなを習いだしたのは3才だった。毎週月曜日の夜、お弟子さん達に混ざって花をいけていた。その間「テキスト」に連載された「ホッホちゃんとケンちゃん」の頁も、皆さん楽しみにして下さっていた。

その彼もこの秋には22才になる。スポーツが好きな好青年。家では女性軍によく怒られているが、そんなことではへこたれない。明るく優しいのが取り柄のようである。そして近頃、自分にとつての「いけばな」を見つめなおしているようだ。

竹島百合

△2頁の花▽ 櫻子

花材 夏櫛なつぼし(躑躅科)

竹島百合たけしまりばり(百合科)

撫子なごしこ(撫子科)

花器 手付竹製バスケット

子供の頃、母と市場へ行く時はこんな面白い物籠だった。今は季節の草木をざっくりいけて楽しんでいる。爽やかな初夏の籠花。



横から見た奥行き



アメリカ手毬下野

△3頁の花▽ 櫻子

花材 アメリカ手毬下野(薔薇科)

向日葵(菊科)

花器 陶水指

生活雑貨を扱う店で大きな水指を買った。安定がよく、実になり始めたアメリカテマリシモツケも大きな枝を伸び伸び挿せる。ヒマワリ2種を合わせると同系色の濃淡が美しい。

横から見た奥行き



スモークツリー

△3頁の花▽ 櫻子

花材 スモークツリー(漆科)

薔薇(薔薇科)

花器 ヘレンド窯花器

スモークツリーは小さな花が咲いたあと、結実するのはほんの僅かで、殆どの花は散った後花柄を煙状に伸ばして実を守るように取り囲み、やがて実と共に風に乗って飛んで行く。子孫を残すという目的のため、それぞれが役割をしっかりとこなしている。

そんな事を知ると、スモークツリーが愛おしくより美しく見えてくる。その美しさを長く保ってほしいから、水揚げを充分にするようにしている。水の中で足元を切る。足元を割っておく。足元の皮を削る。いけた後も時々は切り直す。

ピンクのバラと赤いスモークツリー。ハンガリーの名窯、ヘレンドにいけると、気分はヨーロッパ貴族

横から見た見た奥行き



立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ④7

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

みむらさき

祝言上中。心にも用いる。

つる水木

祝言上中。心に用いる。

えびついでばら

非祝言。水ぎわ。

仙蓼せんりょう

祝言。水ぎわ。

下野

祝言水ぎわより中迄上る。

きじの尾

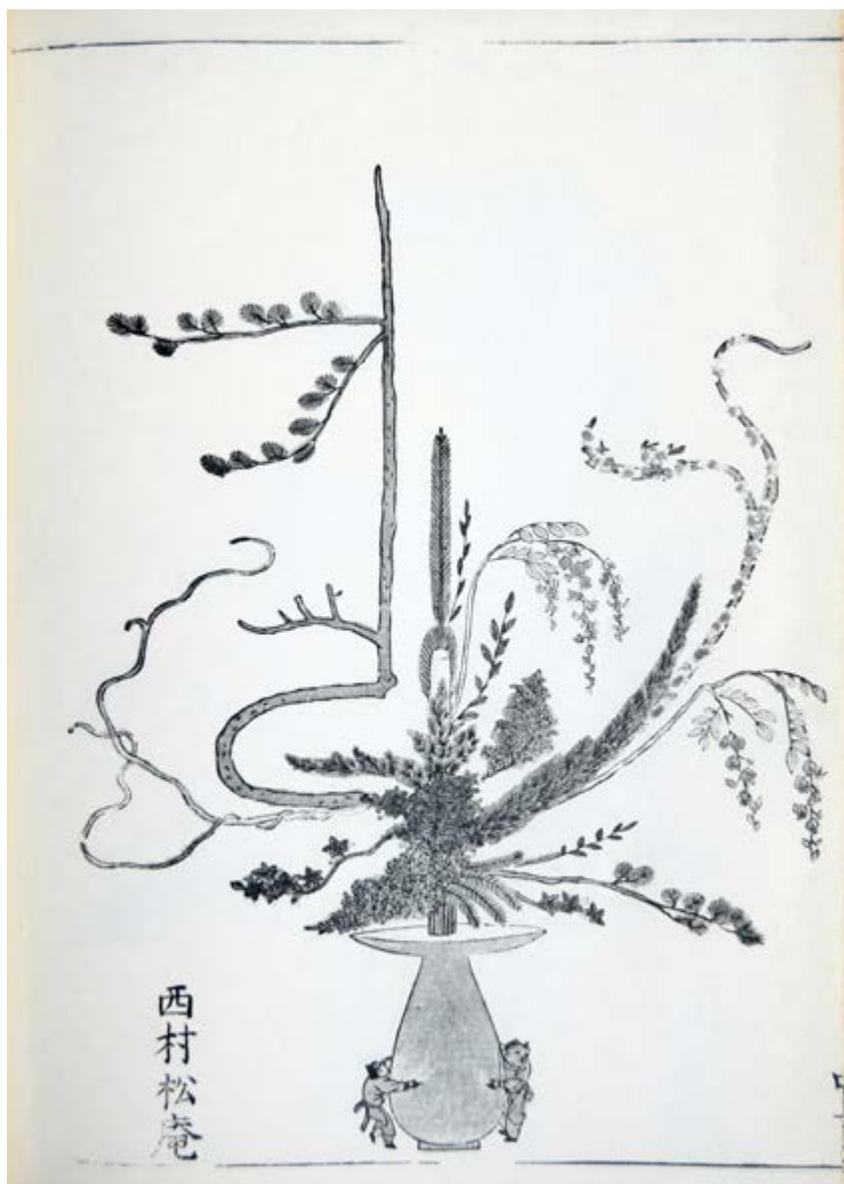
祝言。水ぎわ。

第六十図

立花 松除真

西村松庵

松 藤 苔 伊吹 柘植 躑躅 小羊齒 嫩



西村松庵

藤が使われた立花図5つのうち残り2つを紹介しておく。第六十図の真の松の異形さには目を見張る。こんな曲がった松が本当にあったのだろうかと思いが、実際の自然は変化に富んでいる。おそらくこのような姿の松があったのだろう。「草木自然の形をそのままに」使い、役枝やあしらいを工夫して呼応させ、それにびつたりの器で受け止めている。中から仙人が出てきそうだ。

しのぶ

非祝言。水ぎわ。

矢筈やはず

祝言。水ぎわ。

磐梨いわなし

非祝言。水ぎわ。

がんそく

非祝言。水ぎわ。

白丁花はくちようけ

水ぎわ。

岩檜葉いわひば

祝言。水ぎわ。卷栢いむひば（多識）。

異名、万歳ひようそく、豹足ひようそく。長生不死草と云う。

ひとつば

非祝言。いわかしは。石葦せきい。



第六十三図

立花 苔除真

服部三郎右門

藤 苔 松 躑躅 柘植 著我

第六十三図は苔のついた枯れ松の真が立ち昇り、内副に松とそれに絡まる藤の花が美しく優しい曲線を見せている。超然とした六十図と比べてみると面白い。

次頁に通用物の竹の項目に続いて書かれてあった熊笹が使われた二株砂物（第三十八図）を載せておく。特徴のある砂鉢に腰低く丁寧につくられた風景。自然の息吹を見つめる眼差しが感じられる。

荔枝

祝言。水ぎわ。五色の物あり。砂の物ばかりに用うべし。

薔薇

祝言。水ぎわ。順和名集に波々良、草の部に入。

本草綱目に云う、この草蔓柔らかく牆に依り援けられて生ず、故に牆靡となづくと云々。立て様、椿に同じ。

右通用の出生、和漢の証文明らかなり。通用に二義あり、出生と景気となり。藤、竹、牡丹、萩、南天の類は出生の通用なり。景気の通用と云うは、小しだ、忍しの、きじの尾の類は山草にして、常に木にまじわり生えるゆえ、景気を以て通用とす。この類数多あり。なぞぞらえて知るべし。

立花秘傳抄二の終

第三十八図

二株砂物 伊吹真
桑原次郎兵衛
伊吹 梅 苔 水仙 嫩 椿 熊世



※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』(日本華道社刊)

『花道古書集成 第一期第二卷』(大日本華道界刊 思文閣出版刊)

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』(思文閣出版刊)



京都いけばなプレゼン
テーション2018

△9頁上の花▽ 桑原仙溪

花材 太蘭(蚊帳吊草科)

ゴールドエンココ椰子

(椰子科)

アランセラ(蘭科)

糸芭蕉枯葉(芭蕉科)

モンステラ(里芋科)

花器 陶大水盤(ザールバーグ作)

△9頁下の花▽ 秋山慶淑

花材 ストレリチア(芭蕉科)

ニューサイラン(竜舌蘭科)

花器 白黒陶花器(竹内眞三郎作)

「すこいゾ!いけばな 華道家によるフェスティバル」と題して、花展に加えて様々なイベントを行った。大先生も若手も、いけばなの魅力を伝えたいという思いは同じ。そしてアクションによって自分達の経験値も上がる。ご来場の皆さんがいけばなを始めて下さいますように。





日本いけばな芸術特別
企画 in 彩の国さいたま

金沢21世紀美術館で開催された特別企画展から8年ぶりに、様々なイベントを盛り込んだ展覧会がさいたま市の埼玉会館で行われた。

立花、生花、投入、盛花などの様式ごとの展示や、実、葉、根など花材ごとの会場構成になっっていて、観る人にいけばなを色んな角度から知ってもらおう仕掛けになっていた。

また、杜若の葉組や三管筒の生花などの実演をじっくりと解説つきで見ることが出来たり、私達花道家にとっても大変貴重な勉強をさせていただいた。(写真①)



①

養護学校の生徒達と、女子サッカー選手のいけばな体験の様子が会場ですべて上映されていた。(写真②③)



②



③



裏白の木

彩の国さいたま出品作

△10頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型

花材 裏白の木（薔薇科）

花器 陶コンポート（宇野仁松作）

裏白の木の緑白色の葉色が会場で人目を引いていた。

古典いけばなは型が決まっているが、その中で花材の個性をどう生かすかが問われる。厳しい自然の中で育った逞しい枝には風格が備わる。それを損なわないように型にはめるのが難しかった。

アガパンサス

△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花

花材 アガパンサス（彼岸花科）

花器 ブルーガラス花器

（パーティル・パリーン作）

アガパンサスの花は型通りに配置すると葉と重なってしまうので、胴と留の代わりに真囲と控に入れている。青いガラス花器と合っている。

横から見た奥行き





陶のランプ

素溪(健一郎)

花材 グズマニア・ディステイフロ

ラ(アナス科)

モンステラ(里芋科)

花器 サボテン型陶製ランプ

私、『ホッホチャンとケンチャン』のちっちゃかったケンチャンは昨秋21歳になりました。

最近、「花あそび」と題して様々なものと生け花を掛け合わせて、現代における新しいいけばなのあり方を模索しています。

祖父と祖母の花あそびは、私の身の回りにある好きな物を使って花と掛け合わせていくものでした。幼く花にさほど興味のない私の目から見ても目を引くものがあり、花に興味を持ったことを覚えていきます。

生け花に興味のない方にも、私と同じように花以外の入り口からでもいいので、生け花の道に巻き込んで行きたいと最近強く思うようになりました。自分なりの解釈で様々なものと生け花を掛け合わせる事を楽しんでいます。

写真は友人が作った陶のランプです。明かりの代わりに花で命を吹き込みました。



インスタグラム
(@ken161022)



いけばな写真を
投稿しています!

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
8月号
No.662

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





倉敷市真備町の大水害

7月5日未明から6日にかけて西日本各地を襲った集中豪雨。河川の氾濫や土砂災害によって二百人以上の方が亡くなった。その後の異常なまでの猛暑の中で、被災地では過酷な生活が続いている。

流派内でも数名の自宅が水没。親戚や友人が災難に遭い、復旧のために毎日大変な思いをされている人が多い。

世界各地で増えてきた異常気象。国や地方自治体は、今後増えるだろう自然災害に対するできる限りの対策を講じてほしい。今一度、国民の暮らしを守るという観点から、様々な見直しをしてほしいのに、被災地で断水で苦しんでいる間に、国は水道事業を民間企業に売り渡せる法律を成立させようとしている。政治の怠慢で人々が苦しめられるような人は無しにしてほしい。

エレムルス

△2頁の花▽ 仙溪

花材 エレムルス(百合科)

ドラセナ・コンシンネ(竜舌蘭科)

プロテア(ヤマモガシ科)

花器 陶花器

砂漠のキャンドルとも呼ばれるエレムルス。中央アジア西部原産で乾



横から見た奥行き

チヨコレイト色のネオレゲリアと2色のニューサイラン。観葉植物だけできり合わせた。それぞれの色や質感が、より印象的になる。金属花器がその印象を際立たせてくれる。

花器 真鍮花器

ネオレゲリア (ハイナツプル科)

ニューサイラン2色 (竜舌蘭科)

花材 ニューサイラン2色

△3頁の花▽ 仙溪

ニューサイラン2色



横から見た奥行き

燥に強い。丈夫そうな葉と花を出合わせて、夏を元気に乗りきりたい。



羽毛鶏頭うもうけいとう

△ 4 頁の花▽ 仙溪

花材 ユーカリ (フトモモ科)

羽毛鶏頭 (寛科)

ヒペリカム (弟切草科)

花器 陶コンポート

夏から秋の作例。ケイトウは種類が多い。トサカ、クルメ、ウモウ、ヤリ、ヒモ、それぞれ形状が異なり印象も違ってくる。

横から見た奥行き



レモンだより

花の近くがお気に入り。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ④8

立花秘傳抄 三

草之部

草初めて生ずるを山やまと云う。古文に艸そうの字につくる。艸は百草そうみょうの惣名そうみょうなり。説文註曰く、草の字を用いるは非ひなり。草は計櫟とれきの実なり。今の俗、艸木の艸と為す。艸草そうそう通じ用いる事久し今改むべからずなり。

説文に枝柱しちゆうなり。枝莖しきより生ず、故に枝柱と云う。又曰く、草を莖しきと云う、竹を筒とうと云う、木をば枝と云う。

花爾雅じがに云う、木これを華はなという。草これを榮えいという。花実はなみらざるを英えいという。
あだはな

金錢花

祝言。水ぎわ。金錢花きんせんか(形によりて名付く)。

異名、長春菊ちようしゆんかく(花のさかり久しきにより名付く)。

物名ものな|| 総稱。

説文せつぶん|| 説文解字。中国最古の漢字字書。後漢の許慎の著。

計櫟とれき|| ?。

爾雅じが|| 中国最古の辞書。

この花四季ともにあるといえど、霜ふり月の頃より二月にがつまでは、ことさらに葉も茂り花もかつ咲きて、前置、草どめによろし。水仙一色の前置に専らこれを用いる。針金を莖しきに通し遣うべし。

落花

祝言。水ぎわ。

異名、款冬花かんとうか(冬にいたりて花さげばなり)。

虎鬚草とらのひげくさ(かたちによりて名付く)。立て様前におなじ。

著我

祝言。葉是水ぎわより中まで上る。花を中

まで上る時は、下に葉をあしらうべし。仮葉かりはの時は上までも用うべし。

異名、故蝶花こちようか。和名、こやす草。

著我は四時しばまざる草にて木にあしらい、草にまじえて、重宝なる物なり。古人も著我は立花たちげの輔たすけなりといえり。然れども近代の人、檜

扇を専らと遣うて、著我を用いざることは、至りて面白き所あることを知らざるものか。

著我の葉を水仙、杜若にがしにかり用いる時は、三枚とつぎきたるをそのまま返るべからず。一枚づつもぎ葉にして借るべし。三枚とつぎきたる時は、著我の気色にみえて水仙、杜若の葉とは見ゆべからず。

著我の借葉かりはは鶏頭花けいとうげ(一枚高く用いる古法)、水仙、杜若にがし、菖蒲あやめ、一八、花菖蒲、似たるをもつて借るべし。

著我の葉先あしくとも裁たちつくりて用いる事大いに嫌う。

ぬけしやがと云うは、胴、正心に木を立て、副請に草を立てる時は草の縁えんきれるなり。然るに正心の前に著我を高く立てのぼすときは、両方の草これ著我を媒なかたちとして縁切れる事なし。

控葉ひかえというは、葉のあつきをえらび、白根の少し上より切り、似たる葉二枚とりあわせ、生竹の皮目をうすくひらめに削り、根もとのあわせめある所より指し込み、小刀の刃を筋違すじかいにて折り付けて用いるなり。



著莪の出生は外葉長く中ほど短し。名付けて鳶尾草えんぴという。瓶に立てる時そのまま用いるはとびのお作意なきゆえ、一枚つつもぎて、扱出生の道理にかなうように立てるを生著莪と云う。出生にそむきたるを死著莪という。三枚立てる時は立葉必ず用うべし。葉先枯れたるもおもしろし。

高麗菊

祝言。水ぎわ。春の立花には賞翫の物なり。



第三十九図

立花 松除真
 桑原次郎兵衛
 松柏 著莪 芍薬 柘植 要 熊世 小菊

針金を通して遣うべきなり。

鴨脚花
いちばつ

祝言、中より遣いて水ぎわまで下る。

異名、紫羅傘。
しらすん

この花生直なるゆえ横へはいだすべからず。自然横へ出すべき景気の花ある時は、まず一本すぐなるを立て置き、横へも出すべし。杜若、あやめ、莞草、鶏頭花、すかし百合草、姫百合草、水仙、女郎花、藤ばかり、きすげ、しおん、あふひ、がんび、せんろう、紅花の類いづれもこれになぞらえて知るべし。

あやめ

祝言。前に同じ。あやめとは菖蒲をいへど、
しょうぶ

俗専らこれをあやめと呼ぶなり。

※参考文献

『いけばな美術名作集』第三巻 立華時勢粧（日本華道社刊）

『花道古書集成 第一期第二巻』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』（思文閣出版刊）



第四十図

立花 梅擬除真

桑原次郎共衛

梅擬 薄松 栢植 椿 夏櫨 柏 茗莪

桑原次郎共衛



ビバーナム・コンパクタ

△表紙の花▽ 櫻子

花材 カラー2色(里芋科)

ビバーナム(刃冬科)

花器 金彩ガラス鉢(ウルリカ作)

夏の時期、枝ものが少なくなるが、最近出回るようになった実もの。枝も太く立派で葉も実も多い。葉を間引いてやるとたわわな実がこぼれ落ちる様に見える。

ウルリカ・ヴァアリンさんが描いたお魚が実を狙っている。紫色と白色のカラーもパクパク口を開けてる海藻かも。

深い海の中にあるような景色。

横から見た奥行き





会場 市民交流プラザふくちやま
出品 桑原仙溪

京都の6つの芸術分野(いけばな、工芸、写真、書、彫刻、日本画)の作品展が福知山市内3カ所で開催される。9日間の会期の最初の3日間にいけばな展を開催。京都いけばな協会が協力し、10人のいけばなを展示する。初日11時から書といけばなのコラボライブもある。

他分野の展示は、佐藤太清記念美術館、丹波生活衣館ギャラリーで9月30日まで観覧できる。

ブルーベリー

△9頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型

花材 ブルーベリー(躑躅科)

花器 銅薄端

名古屋の先生から庭で育ったブルーベリーを頂いたので、生花にしてみました。実は熟すと落ちやすい。青いうちは水揚げも良く、いけて3週間以上経つがまだまだ大丈夫だ。

横から見た奥行き





紅花

△10頁上の花▽ 仙溪

花材

木苺 (薔薇科)

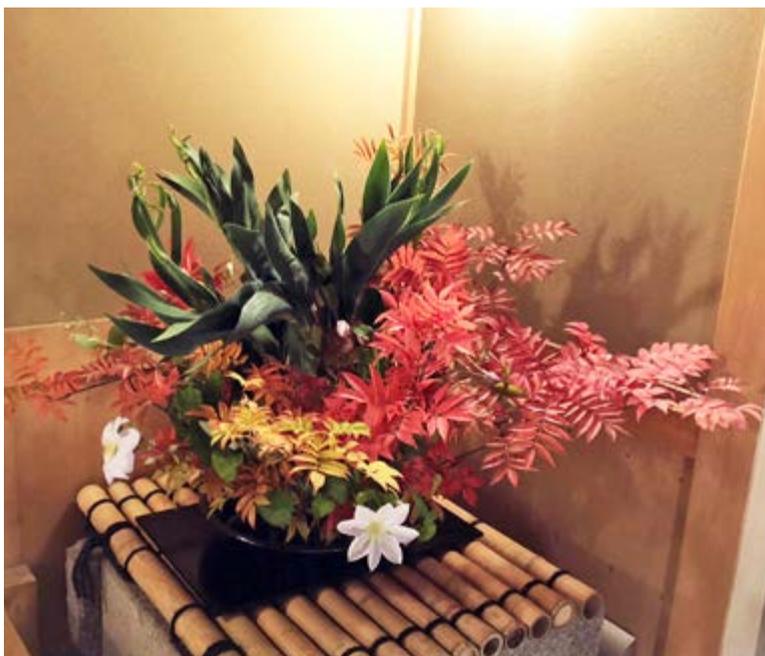
透かし百合 (百合科)

紅花 (菊科)

花器

陶花瓶 (伊藤典哲作)

ベニバナはエジプト原産で紅色染料として4〜5世紀に渡来した。先端の花を集めて利用するので、末摘花と呼ばれた。



スカシユリの黄色とよく似合う。

横から見た奥行き





祇園祭にいける

△10頁下の花▽ 仙溪

花材 七竈（薔薇科）

檜扇（菖蒲科）

鉄線2色（金鳳花科）

花器 焦茶色陶水盤

今年「京料理 田ごと本店」に躍動感のある立派なヒオウギをいけた。ナナカマドの紅葉と白と紫のテッセン。猛暑の中でも元気な花でお迎える、の気持ちを込めて。

唐松草^{からまつそう} △11頁の花▽ 櫻子

花材 唐松草（金鳳花科）

女郎花（女郎花科）

スプレー菊（菊科）

花器 陶花瓶

カラマツソウは、キンポウゲ科の植物で、繊細な白い花弁が丸く集まって咲く姿が唐松の葉を連想させる珍しい日本固有の花。葉がオダマキソウのような優しい形をしている。

横から見た奥行き





松明花たいまつばな

仙溪

花材 山帰来(百合科)

鶏頭(鳶科)

松明花(紫蘇科)

花器 陶花瓶

この赤い花は、タイマツバナ、モナルダ、ベルガモット、どの名前でも呼ぼうか迷ってしまう。あと、ヤグルマハッカとも呼ぶ。北アメリカ原産のシソ科の多年草で、ハーブティーなどに利用される。赤花の他に白、紫、ピンクなどの花色がある。去年も今年も、ちょうど祇園祭の頃に咲いている。夏祭りの活気に、赤い炎のような花がよく似合うが、この伸びやかな姿は、特別に栽培されたものである。力のある花はいいものだ。

竹の根株のような花器にサンキライ、ケイトウ、タイマツバナをいけた。自然の伊吹に元気をもらえる。

日本の華道を紹介する番組
「花知道答案」

中日名師插花課

中国のインターネットサイト「豆瓣」の情報番組「豆瓣時間」に協力させてもらった。日中の華道家のいけばなを花材や器、道具の紹介から、いける過程や技術、心得などを動画で紹介する。12人の40作品を視る対価は298元(約5千円)。文化を

ちゃんと伝えたいという中国スタッフの真面目さに敬意を表したい。
番組制作：活字文化・日刻。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
9月号
No.663

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ギザギザの葉

△表紙の花▽ 仙溪

花材 飛竜羊歯(獅子頭科)

鉄砲百合「美白」(百合科)

クルクマ(生姜科)

花器 陶鉢(市川博一作)

このギザギザの葉はヒリュウシダの名前で売られていたが、確かな事は分からない。とても繊細な造形だが丈夫で長く保つてくれた。葉の面を前に向けて繁みをつくり、ユリとクルクマを覗かせた。葉に合わせて幾何学模様の器を選んだ。

横から見た奥行き



ミニパイナップルと

枯紫陽花 △2頁の花▽ 櫻子

花材 ミニパイナップル

(パイナップル科)

紫陽花(紫陽花科)

リビストニア(椰子科)

花器 水玉文陶鉢

観賞用のミニパイナップルにしては大きな実をつけていたので、剣山に太い茎をしっかりと挿した。猛暑も平気な実とヤシの葉。美しく枯れた紫陽花を添えて。

横から見た奥行き



今年も祇園祭に参加した。「浄妙山」は平家物語の宇治川橋合戦で、三井寺の僧兵筒井浄妙と一乗法師が共に奮戦する勇壮でドラマチックな山。



バンクシア

△3頁の花▽ 櫻子

花材 バンクシア(ヤマモガシ科)

レナンセラ(蘭科)

花器 赤色ガラス花器

バンクシアはオーストラリア原産ヤマモガシ科の常緑低木。このバンクシアは松の枝葉に似た茎の中から穂状の花を咲かせる。世界中を航海して各地の珍しい植物を採取したジョセフ・バンクス卿に因んでいる。

這うように伸びる低木なので、大きくはいけられないが、こんな時は吸水性スポンジ(オアシス)を使うと良い。茎が直接水に浸かる場合と比べて水が汚れにくいのも有り難い。花器にびったり詰めれば重たい枝も動かない。

ワインレッドのガラス器にいけたので、足元はレナンセラを挿した。スポンジにしっかり水を吸わせていても毎日水を足してあげる事が大切。

横から見た奥行き



避難生活

先月号の2頁、西日本豪雨を6日までとしたのは7日までの間違いです。訂正いたします。

東日本大震災と熊本地震を合わせるとおよそ10万人が未だ避難生活をされている。そしてまた西日本豪雨である。他にも各地で起こった自然災害。温かな支援が継続されますように。可能な限り早く普通の暮らしを取り戻されますように。



ベルギーナッツ

△4頁の花▽ 仙溪

花材 ユーカリ・ベルギーナッツ

(フトモモ科)

トルコ桔梗2種(竜胆科)

花器 陶花瓶

このユーカリの実にはベルギーナッツと呼ばれている。ドライの実として見たことはあるが、珍しく葉のついた生の切り枝で売られていた。面白い花材だが色が地味なので、紫と白のトルコキキョウをとり合わせ、ブルーの西洋的な花瓶にかけた。

ユーカリは小枝だが実はかなり重い。その重量感とバランスがとれるようにトルコキキョウをいけている。一重咲きを軽やかに高くして、八重咲きを花器の口元に集めるのがポイント。白花がよく効いてくれた。ユーカリは種類が多く、花も実も個性的だ。今後も新たなユーカリとの出逢いを楽しみにしている。

横から見た奥行き



立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ④9

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

美人草

祝言。前同。虞美人花と云う。(虞氏とい

う美人の塚より生ずる故なり)

異名、麗春。

芥子花けしのはな

祝言上に遣いて中より下る。

異名、嬰粟花おうぞくか。米囊花。

この花散りやすき物なれば、所によりて用捨あるべし。紅白紫いろいろ取り混ぜ指す時は、一種一種立て分け、色取りよく花ごとに働きあるように立つべきなり。

うつぼ草

祝言。水ぎわ。

和名、うるぎ。

春菊

祝言水ぎわより前置のすこし上まで用うべ

し。

異名、蒿菜花。

第二十八図

立花 伊吹除真

除心の内草の花形 相田湛流

伊吹 杜若 薄 柏 姫百合 榎木 柘植

夏櫛 著我 檜

全118図のうち、杜若は30作に使われている。春のツツジやシャクヤク、夏のユリ、秋のケイトウ、キクとの組みあわせがある。第二十六図は「除心草の花形」の中の一つ。初夏の立花。



銀宝珠

非祝言。水ぎわ。法師に詞通ずるゆえに祝言にあらざるなり。

異名、玉簪花。大菊大蘭。白羈仙。

花は中まで立てのぼせ、葉は水ぎわにあしらう。裏葉、表葉、やれ葉、大小とりまぜて三枚ばかり遣うべし。尤も陰陽の心得あり。水ぎわにて茎きれいに見するを第一とす。

杜若

祝言上中に使う時はかならず水ぎわにも遣うべし。これ水草なればなり。

本草綱目図する所は、日本のかきつばたにあらず。菰敬そけいが本草の註に劇草かきつばた、一名馬蘭と云々。順和名集に劇草の字を用いる。

異名、紫菊。かほよはな。

齋宮花尽の異名の歌

夏草のおほかる中にかほよはな折袖までもむらさきになる

杜若真の一色というは、前置までも残らず杜

若にて立てるなり。然れども前置になる杜若なき時は、ほかの草花をもつて前置にする。これを草の一色と云う。口伝。

杜若の一色すずきに薄の葉を借り用いる時は、一枚ずつもぎ葉にして二枚を二所に借るべし。葉二



第九十七図

立花 杜若一色

杜若一色(の真) 寺田清左衛門

杜若 著我 ※ () 内は初版

枚と付けたるは陰陽そなわりて、全体薄と見ゆることを嫌うなり。

杜若一色を立てんとおもわば花多く調え、白き、紫、つぼみ、中ひらき、盛りの花茎の曲直、葉の能をえらんで、同意長くらべという事を第一と心得て指すべし。然りといえど師伝と巧者の二つかけては指し得がたし。

同一色には白き花をすくなく、紫をおおく用うべし。紫は正色、白きは変色なり。花の彩つづき面白く、混乱せざるように立てるを第一とす。

杜若正心に用いる時は花より葉を高く、花より葉を多く用うべし。

杜若の花数すくなき時は、一八、花しようぶなどをかるに、一本かる時は大き方にひかれて杜若となるなり。二本かる時は杜若にならず。

かきつばた紫白の種かわりたりといえど、祝

言の花の時は紫白合わせて、四本六本立てることを嫌う。他これになぞらえて知るべし。

杜若の葉はひらめによく見ゆるように指すべし。又葉を横へ遣う時は、茎の中ほどに付きたる葉をえらんで、茎をためて思うように遣う時

第九十八図

立花 杜若一色

杜若一色(の行) 桑原次郎兵衛

杜若 河骨 著我 ※ () 内は初版



は、水をよくあげ葉もしおれざるなり。茎のためようは両手にて押し寄せ、すこしねぢてため、そのため口へ頭より竹くぎを打ち込む時は、ためもどらざるもの也。



杜若ためようによりいろいろにくるうなり、口伝。

杜若盛りの時分ならば、正心、請、副に用うべし。四季咲き又は残花などには立てようあり。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』（日本華道社刊）

『花道古書集成 第一期第二卷』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）



「立花時勢粧下」に秘曲の図として掲載されている7つの「二色」の一つに「杜若一色」がある。杜若一色では前置を変える場合、杜若が水草なので同じ水草の河骨（こうほね）が使われている。茎の撓め方が詳しく書かれている。両手で押し寄せながら少しねじって撓めたところへ、竹くぎを刺すと撓めがもどらない。さらに撓めによって色々に狂う（花茎が曲がる）ことを教えてくれている。

第九十九図

二株砂物 杜若一色

杜若二色の砂の物 西村松庵

杜若 河骨 蒼莪



ピンククッション

櫻子

花材 ピンククッション(ヤマモガ

シ科)

羽毛鶏頭(寛科)

ローリエ(楠科)

花器 陶花瓶

ピンククッションも針山はりやまも知らないと若い学生は言う。家には無いし見た事もないのだろう。小さなソイグセツトくらいしかないのかもしれない。アフリカやオーストラリアには他の国とは違う独特の珍しい植物が沢山ある。

似ているものに例えられた名前も多くカンガルーポト、ブラシノキ、ライスフラワーなど、最初に見つけた人は嬉しくて夢中になって木や草に名前をつけたのだろうか。よくこんなにピッタリと思える名前を考えたなあと感動する事も多い。

艶やかな光沢のあるウモウケイトウを葉のように添えた。

横から見た奥行き





輸入花材の生花

リュカデンドロン（銀葉樹）は南
アフリカ原産、ヤマモガシ科の常緑
樹。長めの枝なら生花にできる。
ドラセナ・ブラックリーフは千年
木（コルデイリネ）の仲間と思われ
る。蘭を合わせて色を加え、シヤガ
を借葉として添えた。

リュカデンドロン

△10頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け
花材 主株 リュカデンドロン
（ヤマモガシ科）
子株 ミニ薔薇（薔薇科）
花器 陶水盤

ブラックリーフ

△11頁の花▽ 仙溪

花型 生花 二種挿し
花材 ドラセナ・ブラックリーフ
（竜舌蘭科） 蒼我（菖蒲科）
ミニ胡蝶蘭（蘭科）
花器 ガラス花器



横から見た奥行き



レモンだより
庭に何かいるのかな？



セルリア

櫻子

花材 アンズリウム(里芋科)

セルリア(ヤマモガシ科)

斑入モンステラ(里芋科)

花器 青色ガラス花器

今年の夏は暑くて暑くて花が保たなくて、とても苦労した。それでも新しく花を生け替えると、スツトリフレッシュして自分も元気になる。水がお湯にならないように何度も花器に氷を入れたり、夜寝る前に水を替えたり色々工夫した。日持ちする花を選んでいたので、今月号にはオーストラリアや熱帯の植物が多い。アンズリウムの足元に添えたセルリアもオーストラリアからの輸入花材。南アフリカ原産の常緑低木で柔らかで繊細な花だ。他が枯れてしまった後もドライフラワーにして長く飾っている。英名のブラッシング・ブライドは「はにかんだ花嫁」という意味なので、ウエディングブーケに使われる花だそうだ。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
10月号
No.664

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ハンギングヘリコニア

△表紙の花▽ 櫻子

花材 ハンギングヘリコニア

(芭蕉科)

トルコ桔梗2種(桔梗科)

花器 陶コンポート(柳原睦夫作)

固い茎から花が長く釣り下がるハンギングヘリコニア。ピンク色した苞は折れやすいが、花茎は強くしなやか。茎を切るとバナナの良い香りがして、パショウウの仲間の植物である事を感じさせてくれる。柳原睦夫さんのポップで艶やかな花器に良く似合う。

横から見た奥行き



スズバラ

△2頁の花▽ 櫻子

花材 鈴薔薇の実(薔薇科)

丸葉の木(満作科)

二輪菊2種(菊科)

花器 陶花器(小川欣二作)

スズバラという名前で流通しているバラの枝。お稽古花にも使える



くらしい沢山切り枝として出荷されるが、正式な名前では呼ばれない。バラ科の常緑低木のロサ・ゲラウガ。葉も花も付かない姿なので、出来れば秋らしい彩りの葉を添えたい。

横から見た奥行き



菊の季節がやってきた

△3頁の花▽ 仙溪

花材 糸菊3種(菊科)

白菊(菊科)

スプレー菊4種(菊科)

花器 陶水盤

菊は中国で生まれ古く日本に渡ってきた花だが、その後さまざまな品種が日本で生まれ、今では世界各地で新品種が生まれている。冬に向かって多くの植物が眠りにつこうとする時に、色鮮やかな花を私達に見せてくれる菊。数種類の菊を集めて、菊の季節がやってきたことを喜びたい。



珊瑚樹
さんごじゆ

△ 4頁の花 △ 仙溪

花材 珊瑚樹 (木犀科)

菊 2種 (菊科)

花器 陶花器 (竹内眞三郎作)

サンゴジュはスイカズラ科、ガマズミ属の常緑高木で、日本から東南アジアにかけての温帯〜亜熱帯に自生する。燃えにくいいため防火樹として庭木や生垣に用いられている。白い小花が集まって咲いたあとで黒く熟して落下する。

常緑樹なので艶のある濃い緑の葉が密生している。綺麗な葉を残して少し整理し、赤い実が目立つようにした。かなり重みがあるので安定のいい花器に投げ入れ、純白と薄紅色の洋菊を加えて、明るく現代的な雰囲気にとめている。

横から見た奥行き



立華時勢粧りつかいまようすがたを読む ⑤

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

きすげ

祝言。中より水ぎわまで。

一名、金萱花。

姫萱草ひめかんぞう

祝言。中より水ぎわまで。

石竹せきちく

祝言。前置の少し上より水ぎわに用いる。

異名、瞿麥くはく。千葉なるを洛陽草なでしこといい、万葉なるを四時草なでしこという。

和名、日暮し草。袖むれ草。

古歌

から国に有けることはいさしらすあつま
のおくに生る石竹

薊あざみ

非祝言。水ぎわ

異名、千針草せんしんそう。姫あざみ。

はりのなきをいう薊あざみと眉まゆほぎと二草一名か
未だ考えず。

第四十七図

立花 松除真

桔梗屋平右衛門

松 杜若 芍薬 薄 栢植 躑躅

要 小菊



桔梗屋平右衛門

綽約ニ姿がしなやかで優しいさま。

花菖蒲

祝言。上中に使う時は水ぎわまで下げる。

異名、白昌。水宿。

和名、吹喜草。

万葉集

大内や玉の軒ふくふきく草おほくの千世
にひかれてやこん

花遣い葉つかい杜若に同前。

芍薬

祝言。上中。

本草綱目に云う、芍薬は綽約、猶花の形綽

約より以て名となす。又牡丹を花王と云い、

芍薬を花相と云う。(花相は摂政関白の位な

り)

順和名、衣比須久須里。ふかみ草。はつか草。

かほよ草

芍薬は花の色おおき物ゆえ取りまぜ遣いて

苦しからずといえど、今様これを用いず。白

き花は白き花、紅は紅とその種をえらび三色

にても五色にても、縁つづきありありと混乱

せざるように立てるを吉とす。

芍薬を立てる時はやわらかなる心を用うべ

し。芍薬美花なるゆえ、ふとくいやしきは不

相応にて見悪なり。

第四十八図

立花 松除真

大坂屋五郎左衛門

松 晒木 芍薬 柏 栢植 要 小菊

杜若 薄



芍薬の葉、古代はしげく付けて立てるを本意とす。然るに近代は大輪なる花多く用いるを規模とするゆえ、おのづから葉つかい薄し。ただし一方あつくは一方すく景気よろしく立つべきなり。

花のうつむきたるを遣うとも、葉は出生のごとく天をうけさせて遣う時は死花にあらず。

芍薬水ぎわまで下らずといえども、残花にたりては控枝のあたりまでも苦しからず。諸花しよか残ざんになりては短く咲くゆえなり。

芍薬みじかきを高く遣う時は、筒をこしらえ遣うべきなり。又芍薬遠方より求め来たらば、根をやき箱に入るべし。すこししほるとも水に入ればものごとくなり。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』

『花道古書集成 第一期第一巻』

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

規模 手本。



「立花時勢粧 下 秘曲の図」に「草花」の立花図がある（第九十五図）。春の訪れと共にいつの間にか草が顔を出している。茎を伸ばし葉を広げ花を咲かせる。そんな草花の生命力を感じる立花図で、彩りの要に2種の芍薬が生き生きと描かれている。

立花時勢粧には8作に芍薬が使われているが、松や檜、伊吹などの真に芍薬が加わることで、春の瑞々しい生命力を感じる立花になっている。

第九十五図

立花 芦除真

草花 僧光清

芦 薄 百合

芍薬 桂若 小菊 熊笹 紫苑 著我

（初版は富春軒）

芍薬 桂若 小菊 熊笹

【記録】

京都文化力プロジェクト
KYOTOアート6
芸術めぐり・いけばな展

会期 9月22日(土)～24日(月)
会場 市民交流プラザふくちやま
出品 桑原仙溪 (写真①)



いけばな、工芸、写真、書、彫刻
日本画の6つのジャンルの優れた
作品を紹介するイベント。

書道家の白井進先生がライブで
「風」の字を書かれ、その前に即興
で花をいけた。他流の先生方の花
にも心地よい風が吹いていた。

世界竹の日記念
竹に触れ、竹を知る

会期 9月17日(月)
会場 京都新聞文化ホール
挿花 桑原仙溪 (写真②)
9月18日は世界竹の日だそう。
それを記念してイベントが開催さ



れ、親子竹籠づくり教室や「日本人
の暮らしと竹」をテーマにした講演
会、篠笛の演奏、竹の種類や竹製品
の紹介などがあった。
水盤に孟宗竹を立て、紅葉した七
竈、赤と橙の鶏頭、鳥兜をいけた。



ヒオウギとボンベイケイトウ

△表紙の花▽ 櫻子

花材 ボンベイ鶏頭(けいとう) (鳶科)

檜扇の実(ひおぎ) (萱蒲科)

ドラセナ・コルデイリネ

花器 陶鉢

ヒオウギは秋になるとぼけた様な形の実になる。祇園祭に飾る優雅な姿からは想像できない程に。花の頃は真竜、黄竜という名の品種が揃うが、実は射干玉(ヌバタマ)と呼ばれるので、つい黒砂糖味の丸くて甘い和菓子を連想してしまう。

取り合わせも花の頃とはガラリと変わり、実になると秋に咲く可愛いネリネを添えたりするのも楽しい。

インドの種を日本で蒔いて育てたボンベイケイトウも数年前から出てきた新品種。どちらも万葉の時代から歌に読まれた知り合い同士だが、初めて一緒にいけてみた。

横から見た奥行き





藪山査子やぶさんざし

△10頁の花▽ 仙溪

花型 生花

花材 藪山査子(雪の下科)

花器 螺鈿漆塗り花器

ヤブサンザシのいい枝に出合ったので、自然のままの姿を生かして生花にいけた。

ユキノシタ科もしくはスグリ科スグリ属の落葉低木。雌雄異株で春に黄緑色の花が咲き、秋に実が赤熟する。野性味のある花材である。

横から見た奥行き



七竈ななかまど

△11頁の花▽ 仙溪

花材 七竈(薔薇科)

竜胆(竜胆科)

スプレー菊(菊科)

花器 陶花器(宇野仁松作)

信州の高山では9月中頃からナナカマドが少しずつ色付き始める。緑



色から赤色へ染まってゆき、色とりどりの錦の織物にたとえられるような錦秋を迎える。

そんな季節の色彩を、山へ行かずして味わうことが出来ることに感謝せずにはいられない。いけばなは目で味わうご馳走なんだと思う。

ナナカマドの優しい色付きに赤紫色のリンドウをとり合わせて同系色の花瓶にいけ、スプレーギクの黄色で減り張りをつけた。

横から見た奥行き



レモンだより

父の誕生日に咲いてくれたいた白
花の彼岸花。今年はず本咲きました。





出逢い花 (33) 仙溪

キングプロテア(ヤマモガシ科)

グレビレア(ヤマモガシ科)

花器 黒釉花器

前号では4種類のヤマモガシ科植物をいけているが、今回また違うヤマモガシ科の花を2種出逢わせてみた。

ヤマモガシ科の植物は南米、南アフリカ、インド、オーストラリア、ニューカレドニア、ニュージールランドなどに分布している。これらはかつてゴンドワナという大陸として繋がっていた地域だ。

この科にはプロテア、バンクシア、マカダミアなど60属以上、約二千種の植物が含まれるそうだ。原産地域では身近な自然として親しまれ、文化の背景にもなっているのだろう。そんなことを考えながらいけた。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
11月号
No.665

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





小鳥の耳

△表紙の花▽ 仙溪

花材 鴨上戸の実 (茄子科)

ガガイモの花 (ガガイモ科)
薄の穂 (稲科)

花器 銅花器

鳥の耳がついた銅器に二種類の蔓植物をいけた。写真に撮ると、赤い実を食べにやってきた小鳥に見える。花をいけると物語が出来上がる。そんな器の一つだ。ハート形の葉はガガイモの葉で、小さな星型の花が咲いている。小鳥目線のいけばな。



横から見た奥行き

山芍薬の実

△2頁の花▽ 櫻子

花材 梅花躑躅 (躑躅科)

山芍薬の実 (牡丹科)

花器 公長齋小菅籠
桔梗 (桔梗科)

今年の秋一番きれいなヤマシャクヤクの実。みずみずしい葉に包まれ



横から見た奥行き

マユミの実をはじめて見た時、なんて可愛い色をした実なんだろうと思った。とても優しい薄紅色である。ピンクの二輪菊と金茶色の菊を合わせて季節を味わうことにした。

花材 真弓の実まゆみ（錦木科）
菊2種きく（菊科）
花器 三角錐陶花器さんかくすいとう（宮下善爾作）

ピンク色の実
△3頁の花▽ 仙溪



横から見た奥行き

るように育った一輪。弾けて赤（未成熟種子）と紺（種子）の実が派手に色を競い合う。春に清楚な白い五弁の花を咲かせていたとは思えないくらいに強さだ。大好きな公長齋さんの籠に飾った。

第51回 日本いけばな芸術展

テーマ「みらい、かける。」

10月3日(水)～8日(祝)

大阪高島屋7階

①



③



②



④



⑤



⑦



⑥





京都市自治記念式典
オープニングパフォーマンス
会期 10月15日(月)
会場 京都ロームシアター
曾和鼓堂さんの小鼓とのセッションで舞台上で花をいけた。(写真⑧)

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

早百合草さゆり

祝言。真に立てず。また出生、直ならざるゆえ正心に立てず。請、副より遣い下げて控枝までさがるなり。

この花早く咲くをもってこの名有り。

笹百合草。(その葉笹に煮たるをもって名付く)

本草綱目に云う、専ら百病を治す、故に百合草と名付くと、云々。

この花たおやかに葉つき面白し。一瓶に五本七本つかうとき同じようにならず。ひらきたる花、つぼみ、中ひらき取りませ、請の花空にむかいたらば副はうつぶき、右の方後ろむきたらば左は前にむかわせ、葉出生そむに背そむかず取り合いて一面に見る時、花々よくおもい

あいたるをよしとす。もし一輪にても、外の花と不相応なるを独遊ひとゆうとて嫌うなり。
なつりあへんひ

早百合草は花のしべの黄なるをとらざれば花そまりて見ぐるし。



第四十二回

- 立花 松除真
- 濱崎九左衛門
- 松 晒木 百合 柏 夏はぜ 柘植
- 小菊 小羊齒 杜若 蒼菰

葉たれさがる事あらば、竹のはりを指して
葉並びをつくろうべし。たむるには針がねを
用いる。

姫百合

祝言。

上より遣いさげては、水ぎわまでさかると
いえど短く指すことを嫌うなり。

異名、山丹花。さんたん 連珠。れんしゆ 紅花菜。こうかせい

和名、ひかり草。

古歌

夏の野を心しつかにわけ行は花とおとろ
く日かり草かな

姫百合やわらかなる物ゆえ、正心に立てる
時は物にたよらせて立つべし。惣て草の正心
には後ろより松をあしらう師伝なり。

洗百合草すかしゆり

祝言。心に用いず。上中。

越後すかし。べにすかし。そとの浜洗。心
に用いる百合草はこの三色ばかりなり。

あたご百合草
祝言。上中。

さかりゆり

祝言。上中。



第四十三回

立花 晒木除真

三好理兵衛

晒木 松 百合 薄 菊 檜木 夏はぜ
檜扇 小羊齒 伊吹

ためども
為朝百合草

祝言。上より中まで。

鬼百合に対して名付く。富士ゆりとも、うたゆりとも所に替わりて名異なるなり。

鹿子百合草

祝言。上中。

この百合草水ぎわに遣うことを嫌うといえど苦しからず、口伝あり。然るに当世は習いもなく遣いさげる。似たることの似ぬ事なり。この花にかぎらず大輪なる花、遣いさげて苦しからず立てようあり。師に会つてたづねるべし。

百合が使われているのは13作。そのうち3作を紹介する。第42図は再掲載となるが、太い松の幹と晒木に百合と杜若が添い出ている。第43図は百合、菊、檜扇が太い晒木と共に立てられている。どちらにも晒木が使われて、山間の草地で咲く花の風情をよく捉えている。第44図、45図は床脇の棚の上下2作で、棚の上の胴束と呼ばれる小型で横長の立花に百合が使われている。棚の下のどっしりとした株分け砂物には杜若がいけられている。棚の下に杜若、上に百

合という配置は、麓の水辺から山中へと続く景色の移り変わりを感ぜさせる。

百合の蕊は取るように書かれているが、現在ではきるだけ残して自然を損なわないようにしている。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』

『花道古書集成 第一期第一巻』

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

第四十四図(上)

胴つか(胴束) 檜除真

知休

檜 松 百合 檉木 夏はぜ 著我

第四十五図(下)

二株砂物 松真

中川常意

松 檜 苔木 伊吹 晒木 杜若 柘榴

熊笹 小菊 著我



胴つか

知休

中川常意

柘榴



下がる上がる

△ 9頁の花▽ 仙溪

花材 垂柳繪葉すいりゅうえいば（檜科）

岡虎の尾おかとらのお（桜草科）

花器 銅花器

花展に出品した生花をいけ直した
もの。花展ではトリカブトを覗かせ
ていたが、オカトラノオに変えたら
随分良くなった。スイリユウヒバは
糸状の葉が枝垂れるので、勢いよく
登る姿の花の方が相性がいいよう
だ。下がる物には上がる物を。

横から見た奥行き



永観堂禅林寺 新法主晋山式しんぽんしき

10月14日、永観堂での晋山式に立
花一対を納めさせて頂きました。





穂に穂

△10頁の花▽ 櫻子

花材 ベルグラスモール(稲科?)
粟(イネ科)

木苺(薔薇科)

花器 陶水盤(柳原睦夫作)

稲、粟、黍、蜀黍に薄、洋種のパ
ニカムなど、秋には穂をいけること
が多い。2種類の穂を立ててみると
これが意外に面白い。紅葉したキイ
チゴを足元にいけると、穂が主役の
いけばなになった。色んな穂の組み
合わせで秋を楽しもう。



横から見た奥行き

広がりと集まり

△11頁の花▽ 仙溪

花材 錦木(錦木科)

スプレー菊(菊科)

花器 陶花瓶(市川博一作)



横から見た奥行き



ニシキギの葉が緑色から赤色へ染まっている。敢えて面で見せて扇状に広げたところに深い赤色のキクを集めて挿した。ニシキギの葉が俯かないように気をつける。

プリンスホテル会員誌 エスコート

グランドプリンスホテル京都でのいけばな体験を紹介。宿泊客がお茶とお花を体験できる。普通なら習えない先生の指導を受けられる贅沢な企画なので、是非問い合わせを。



レモンだより

健一郎&レモン。2人は仲良し。





家庭画報 11月号

桑原櫻子が廣誠院の幻の京焼きを紹介。



横から見た奥行き

シダレソリダコ

△12頁の花▽ 櫻子

花材 秋明菊(金鳳花科)

枝垂れソリダコ(菊科)

丸葉の木(満作科)

花器 手付竹籠

はじめていけるシダレソリダコは
まるで打ち上げ花火のようだ。広
がる黄色い小花の間を真っ直ぐにシ
ュウメイギクが昇って行く。秋草たち
の競演。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
12月号
No.666

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





異国の雰囲気

△表紙の花▽ 櫻子

花材 黒色カラー(里芋科)

木苺(薔薇科)

薔薇(薔薇科)

花器 真鍮銀象嵌深鉢

この真鍮の器は両親が写真集「花ふたり旅」の中のエジプト編で使っている。今回黒いカラーと赤い薔薇を合わせてみたがよく似合う。不思議な異国の雰囲気がある。銀象嵌の模様がいい。手間を掛けて作られた器だ。両親の思い出と共に大切な器の一つだ。



横から見た奥行き

フエゴという名の菊

△2頁の花▽ 仙溪

花材 寒桜(薔薇科)

菊(菊科)

小菊(菊科)

花器 陶コンポート

この大輪菊の名前は「フエゴ」。赤と黄色のコンビネーションが見事だ。花も葉も強くて美しい。花付き



横から見た奥行き

この器も「花ふたり旅」のもの。オランダ編で登場するデルフト花瓶だ。旅先で器と花を調達し、風景の中に置いて撮影する。大変なエネルギーが必要だが両親はそんな旅を4度繰り返し本にした。お陰で花器の選択肢が増えたので、こないけばなも生まれる。

花器 デルフト花瓶
磯菊(菊科)

花材 メラレウカ(フトモモ科)
胡蝶蘭(蘭科)

メラレウカ

^ 3頁の花 v 櫻子



横から見た奥行き

のいい寒桜を合わせると、互いに補い合い引き立て合ってくれた。



山茱萸の実 さんしゅゆ

仙溪

花型 草型 副流し
 花材 山茱萸(水木科)
 花器 銅花器

この山茱萸は名古屋の生徒さんが切ってきて下さった枝だ。大きな束を抱えて新幹線に乗って。葉がいっぱい付いていたのを元氣そうな2枚だけにした。こんないけ方ができるのも生徒さんのお蔭だ。たわわに付いた赤い実が美しい。

横から見た奥行き



レモン日より
 とまじぎ生徒さんへ、お出迎えしてくれています。とまじぎです。



立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

葦あし

祝言。上中より下まで用いる。

初めて生ずるを葎かと云う。蘆あしは未だ秀ひいでざるを云う、成長したるを葦あしと云う。花を蓬ほう蘆ろうと云う。

和名、氷室草。なには草。さざれ草。

古歌

難波にはあしというなるひむる草代々の
ためしにかかる葉もなし

芦は出生直なる物なれど、除心に用いる時はふとき針がねを通してたむるなり。請、副には大ように葉の茂りたる物、又みきくるとる物など取り合いよし。心の出し所、著我、檜扇の陰よりやわらかに出したる景気面白し。



谷久兵衛

第七十八図
二株砂物 菅真
谷久兵衛
芦 松 晒木 苔
杜若 夏はぜ 熊笹
柘植 檜扇 龍胆

芦の心は風をもちたる景色あらば、瓶にのせざるもおかし。葉長くしおれたらば断ちつくろい、又しだれたらば竹針にて茎へとちつけてよし。

芦は出生しげき物なれば、二本三本を以て心とす。上より遣いくだしては流枝にも用いる。或る人の云わく、芦は流枝までは下げ用いずと、然れども出生水辺の物なれば、当代専ら流枝に用いる。

古歌

あさき江にねはあらわれて流れ芦のしほのみちひにたよりまちける

芦をたむれば葶くだくる物なり。その上を紙にて巻き、さいさい水をかけざれば、はやくしほるるなり。

蒲がま

祝言。上中。

香蒲と云い、たけのこ 筍を蒲弱ほしやくと名づく。花の上の黄粉ほおろを蒲黄ほおろと名づけ、又蒲槌ほつちと云う。

和名、花かつみ。

古歌

東路やかほの沼のはなかつみかつみし
人に恋やわたらん



第五十八回

立花 蒲除真

十二屋善兵衛

蒲 夏はぜ 松 苔 杜若 柘植

桔梗 熊笹 著我

蒲は先に勢いなきにより流枝に用いず。

葉遣い薄すすきに同じ。茎に付きたる葉を以て思
うように使うべし。なびきあしき時は小刀の
むねを以て、しごく時は自由に靡なびくなり。

つくも

非祝言。上より中まで。

本草綱目、三稜さんりょう。

和名、江浦草つুকも。丸すげ。大蘭ともいえり。

古代用いずといえども、このころこれを立つ。
針金を入れて遣うべし。

葦あし、蒲がま、つくもと水辺の植物が続く。

葦は6作で使われ、その内4作は葦の真しんである。
第76図は半ば朽ちかけた松の陰から葦や杜若かきつばたが生え
でている。葦と松が片方へ長く伸び広がるのを、太
い晒木とぐいと曲がった太い松でバランスをとっ
ている。もはやどれが請でどれが流枝といったこと
ではなく、自由に絶妙な調和がある。

蒲は2作で使われている。第56図は蒲の真ま。蒲の
葉が上方で伸び広がっているので、他の役所は変化
を抑えているが控枝の苔木にこぶしをきかせてい
る。

第36図は二株砂物でつくも（太蘭ふとらん）の真まである。現在
では真つ直ぐな印象のつくもだが、自然に曲がったもの
を採取して立てたものと思われる。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』

『花道古書集成 第一期第一巻』

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

第三十六図

二株砂物 太蘭真

富春軒

太蘭 芍薬 松 晒木 杜若 小菊

著我 嫩





万年青 九葉一果

仙溪

花型 行型
 花材 万年青 (百合科)
 花器 三つ脚青磁水盤

正月花の参考に。葉のふちに白い斑の入る都城と呼ばれる品種。このような大葉系のオモトは薩摩地方が発祥の地とされるので薩摩万年青と呼ばれている。赤い実の茎には割り箸を添えて固定しフローラルテープで巻いておく。

横から見た奥行き





水仙一色立花 仙溪

花型 水仙一色 直真立まきしんて

花材 10頁 水仙 小菊 著我

11頁 水仙 寒菊

花器 陶花器・銅花器

「立花時勢粧」の絵図をもとに水仙一色立花を立てた（10頁の花）。葉先まで針金を通して絵図と同じ形にしてみたが、かなり自由奔放な姿である。ただこれは模倣であって立花本来の目指すものではない。流祖の富春軒仙溪も「立花秘傳抄」で水仙の葉には針金を通さず、細い竹串で出口を揉めるのみと戒めている。すなわち絵図の流麗な葉の動きは元々自然に備わったもので、人工的に形をつけたわけではないのだ。とはいえ私達の手に入る水仙は素



積雪の後に捻れながら逞しく育つ水仙。淡路島の黒岩水仙郷にて。

横から見た見た奥行き（10頁の花）





横から見た奥行き（11頁の花）

直なものばかりなので、そういう水仙本来の姿を立てると11頁のようになるがこれはこれで良さがある。立ててから運ぶのには葉先まで針金が入っていると安心のだが、出口から先は針金を通さずに自然の姿を生かすようにするべきだろう。いづか水仙郷で見たようなくせのある水仙で、流祖のよきつに立ててみたい。



出逢い花 (34) 櫻子

満天星 (躑躅科)

椿 (椿科)

花器 瑠璃色結晶釉花瓶

(前田五雲作)

花器の瑠璃色にドウダンツツジの紅葉が映える。

この器は高さ20センチの小さな花瓶なのだが、2種の小枝を挿しただけで、素敵ないけばなになってくれた。

この出逢い花の要はなんといつてもツバキの花だ。これから春にかけて様々な種類のツバキが咲くだろう。小さな枝でいいので、いけて飾りたくなる。一種でいけるのもいいが、また新しい出逢いを楽しみたい。

横から見た奥行き

